

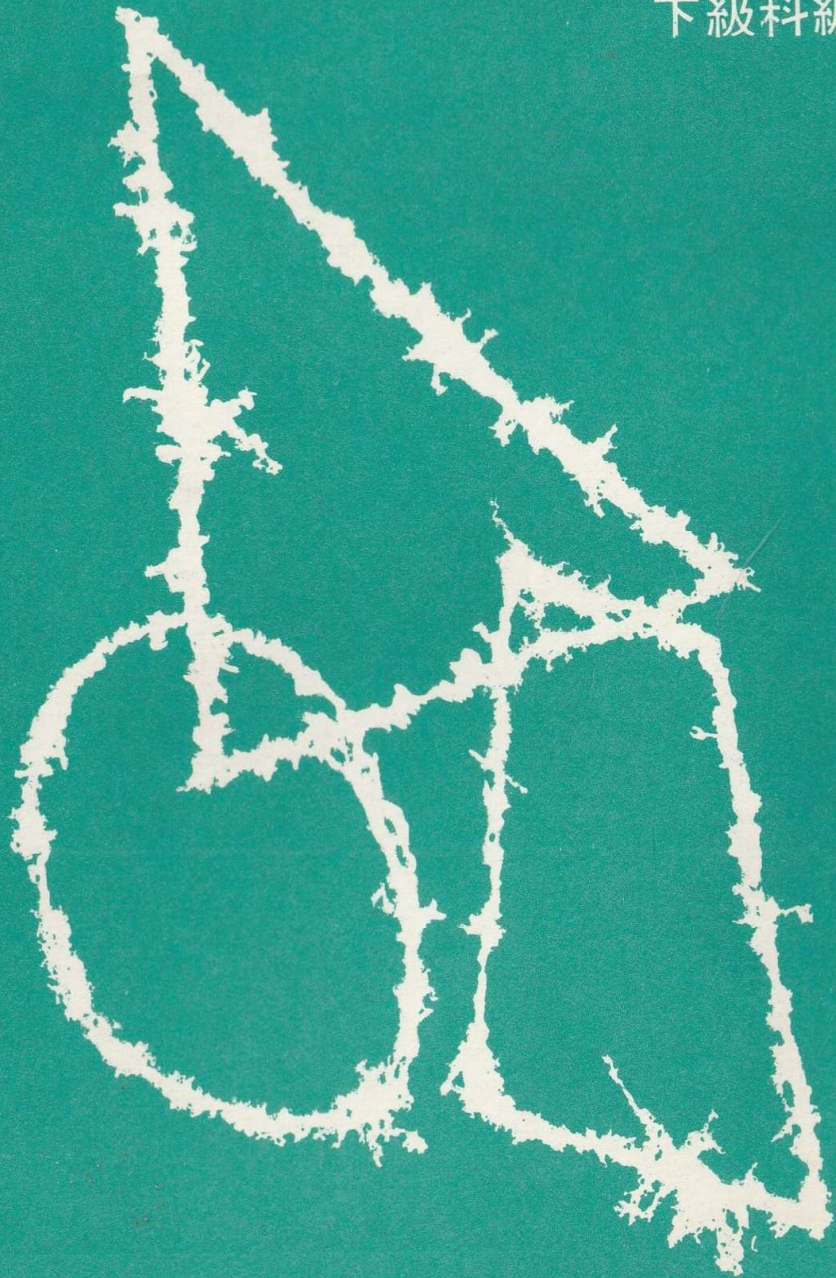
教える秘訣

下級科編

教
え
る
秘
訣

下
級
科
編

ハートR・アームストロング
ヘイセルエックケマン 共著



¥ 1,000

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
日曜学校部

教 える 秘 訣

小学部下級科編

ハート R. アームストロング 共著
ヘイゼル エッグマン
伊 藤 顕 栄 訳編

MANUAL FOR PRIMARY WORKERS

by Hazel Eggeman
and Hart R. Armstrong

Copyright by the Gospel Publishing House
Springfield, Missouri, U. S. A.

Translated and edited by Akiei Ito
Published by Japan Assemblies of God
Sunday School Department
1963, 1968

はしがき

日曜学校教師のための親切な手引書としてこの書をおすすめする。教室の設備、教具の準備など、実にかゆいところに手がとどくように説明してあるのはたのしい。第一線に立つ教師には、原理論はともあれ、このような具体的な手引がほしかったので、いわゆる渴望をいやすものである。

原著は、すでに米国で好評をもって用いられている「Sunday School Workers Manual」というS・Sシリーズであるが、そのうちより特に低学年向の「Beginners」と「Primitives」の二冊を選び、まとめあげたものである。

本書が、幼稚科・小学下級科を担当されるS・S教師はもとより、児童伝道に関心をもたれるあらゆるかたがたに広く利用されることを願ってやまない次第である。

内容に多少わが国の実情から見て高きを望みすぎると思わないでもないものがあるが、訳著として止むを得ないところである。むしろ、これが米国の日曜学校の実情を好まずして紹介するようになって興味深い。訳者は、米国に留学し、特にキリスト教教育に関心をもって勉強された。訳者として最適のかたを得たと思う。

一九六三年四月

日本アッセンブリー教団

理事 細井 修 一

再刊のことば

初版の発行以来、特殊な、しかも狭い範囲の読者に限定されながら、なお好評をもって迎えられてきた本書が、このたび再刊されることは嬉しいことである。

この間に、内外の事情は異なり、日本の日曜学校の働きの中にも相当の進歩があったことが認められるので、再刊に当たって内容の再検討の必要性を感じないわけではなかったが、諸般の事情から今回は見送ることにした。そして単に語句の統一、字句の訂正程度にとどめることにした。

なお、在来一冊であったものを二冊に分けて、「教える秘訣 幼稚科編」、「教える秘訣 小学部下級科編」という別々の書物にしたことを御了承いただきたいと思う。これによって、小学部上級科編の発行と共に、幼稚科、小学部下級科、小学部上級科、中学科とこのシリーズが揃うことになる。

日曜学校関係者の御利用を望みたい。

訳者

一九六九年五月

教える秘訣 小学部下級科編 目次

はしがき

再刊のことば

第一章 教師

第二章 生徒

第三章 生徒の成長発達

第四章 教授法

第五章 実地的な教授法

第六章 授業の準備

第七章 小学部のクラス

第八章 小学部下級科の組織

第九章 子供たちの獲得

139 126 105 85 64 49 33 14 1 v iii

第一章 教師

あなたは教師ですね。今あなたは福音を宣べ伝え、また、クリスチャンの人格を作り上げる日曜学校という世界最大の組織の中の重要なポストに選ばれたのです。さらに、あなたは小学部の下級生を受け持つということで、他に比べることのできないような名誉を得られたのです。あなたには、すばらしい特権と責任が与えられているのです。ですから、あなたは失敗してはいけませんし、また失敗する必要もありません。なぜならば、あなたの陰には、あなたに成功してもらいたいと願っておられる偉大な力があるからです。

一、小学部下級科の教師の立場

小学部下級科の年令の子供たちを教えることほど、重要な働きはありません。このクラスの教師が、取り扱う子供たちは、正式の学校教育を受け始めることによって、家庭の壁によって守られていた今までの生活から離れ出て、新しい外の世界に入り込んで行く、非常に感銘を受けやすい時代の子供たちなのです。かれらは、また、愛に対して強い感受性をもっています。ですから、かれらの心の中にイエスの愛を

注ぎ込むのには、最も理想的な時といえるでしょう。

小学部下級科の教師ほど自分の生徒を理解するという、大きな責任を負わされている人たちは他にないでしょう。またこの年令の子供たちを取り扱う多くの人々の中でも、日曜学校の初等部下級の教師は、特に彼らを訓練し、教へるに重要な責任と機会を与えられているのです。

小さな子供たちを教へることは決して小さな働きではありません。かれらが今わたくしたちから学びとることは、結局はかれらがおとなになってどのような者になるかということを決定するのです。日曜学校小学部下級の教師は、子供たちの知的発達と、道徳心の育成、手足の運動神経の活発化を促すことはもちろんですが、さらにそれ以上のことをしなければなりません。それは、神のことばを語り、神御自身を紹介することです。そして、小さな子供たちを、霊的な生活の基礎から始めて、神のことばを本當に理解するようになるまで導いて行く特権も、かれらに与えられているのです。さらに、小学校などが行なっている人格教育の働きを土台として、その上のものをあたえ、また、補っていく働きができるのです。ですから下級の教師たちは小学校がここまでしかできない、と止めるところから、実際にその働きを始め、子供たちが小学校で学んだ多くの技術や知識を用いながら、子供たちを霊的真理へ導いて行くのです。

下級の教師たちは、子供たちが日曜学校に来る前にすでに体験してきたいろいろなことを、さらに、これらの体験と神のことばを、授業の中でよく結びつけて教へてあげる機会と責任が与えられているのです。このクラスの教師たちは、子供たちをはっきりとした神への信仰へ導き、救主を受け入れ、そしてクリスチャン生活に関する主の教を受け入れて従うように指導することのために召命されているのですが、これは他に見出すことのできない、最高の人生の目的であり、召命であります。ですから教師たちは、小さい子供たちを教へるようにされていることは、神がそれだけ、わたくしたちを信頼しておられることだ、と常に考へるべきだと思います。この目的を達成するためには、最高の能力と訓練とへり下った献身が、必要とされるのです。

二、日曜学校教師の基本的条件

よい日曜学校教師として必要な条件は、なんででしょうか。これについてわたくしたちは調べ、はっきりさせたいと思います。

日曜学校教師の働きは、神のことばを取り扱い、魂の永遠的運命に感化を与えるものですから、霊的な働きであるといえるでしょう。そこでまず、考へなければならぬのは、霊的条件です。他の必要と思われる条件については、その後で考へてみることにします。

第一の霊的条件は、教師がクリスチャンであることです。教師は、真の救いの体験を持ち、イエス・キリストの贖罪により、信仰によって彼と親しい交りをもっている人でなければなりません。その体験は、絶えず成長を続け、すべての人が、かれは間違いなく主の証人であると認めるほど、はっきりした変化を与える真正正銘の体験でなければなりません。

また、日曜学校の教師は、他の人々に比べて、次のようなことにも優れている必要があります。それは、常に、全く神の導きを求め、それを期待していること、神の導きに対して忠実に行動すること、神の助けがなければ、自分では何もすることができない、しかし、かれの助けを得るならば、すべてのことができる、と認めること、神の臨在を絶えず意識し、クリスチャンの徳をもって、それを反映すること、幸いな神にある体験を他の人も持てるようにさせてあげたい、という願いを絶えず持つということ、幸絶えず他の人々のために、とりなしの祈をし、できるかぎりかれらをキリストと一つになるように導いて行く願いを持ち、奉仕すること、などです。

どんなに道徳的に立派な人でも、精神的、知的、肉体的に、すぐれた特性を持っている人でも、生まれ変りの体験を持っていないなら、日曜学校で教えることを許してはいけません。自分にゆだねられた神聖な、そして、尊いこの働きに対して、本当に忠実であろうとするならば、救主を信じ、自分の罪を悔改め、それを言い表し、罪が許された、という聖霊による確信を持っていなければなりません。そのような体験を持つまでは、だれも神の子と呼ぶことはできないのです。ですから責任をとる立場にある校長、牧師などは、まず、すべての教師は救いの体験を持っている、ということを経第一条件としなければなりません。これは最も根本的な条件です。

第二の霊的条件は、教師が洗礼を受けていることです。聖書を見ると主イエスもみずから洗礼を受けて模範を示されたことを知ります。また、マタイによる福音書二十八章十九節の主の御命令の中でも、洗礼が常に重要なものであると示されていることに気付きます。実際に、主に忠実に従って行こうと思ひ、真

の生まれ変りの体験をしたクリスチャンは水のバプテスマを当然受けるのです。これは受ける本人にとって、大きな意味をもっています。なぜなら、洗礼は罪深い過去の生活に死んで、神との交りにある新しい喜びに満ちた生活によみがえる、ということの象徴だからです。

第三の霊的条件は教師が聖霊に満たされていることです。それは、聖霊のバプテスマの経験を持っていることです。もし教師が、多くの幸いな結果を生み出すような働きをし、他の人々に、救主にすがりたいという願いを起こすような感化を与える者になりたいと思うなら、だれにもはつきりわかるような、明白な聖霊に満たされる体験が、ぜひとも必要です。この聖霊のバプテスマは熱心に求め、また、完全な服従をしていくすべての人に与えられるものです。今日まで、多くのキリスト教の指導者たちや、平信徒たちが体験しております。この力強い、そして幸いな体験をした人は、だれでも、これこそクリスチャンの奉仕生活の中でも最も効果的に栄光をあらわすことができる方法であり、またすばらしい喜びの体験であるというでしょう。かれらは、自分がなぜ以前には、これを持たずに生活できたのだろうか、と不思議に思うほどです。ですから、他の人々にもただちにこれを求め、受けるようにと勧めずにはおれないのです。

そのほかに教師に要求される条件として子供に対する愛があげられます。この不思議な愛というものは最高の教育方法よりも、遙かに効果的に子供たちの生命に触れることができるのです。教師として指導者としての重要な資格を全部持っている、もし、愛を持っていない人ならば、その教師は失敗してしまします。よい日曜学校の教師は、魂に対する燃えるような熱情を持ち、愛らしくない者の中に美しさを見、見捨てられている人々に本当の関心を持ち、人類特有の愛に対する叫びを常に感知する人でなければなら

ません。このような教師こそ、教えることに喜びを見出す人です。「教育の最も重要な部分は教えることではなく愛することである」という言葉は、名言だと思えます。愛にこそ、生命、力、喜び、教育の目的というものが、一切がかかっているのです。よく準備した学課が、真の効力を発揮するのは、この愛の故であり、飢え渴いている心を探えて、信頼を得、語る言葉を受け入れさせるのは、この愛の働きにほかならないのです。あなたは子供たちを愛しながら、教えるのです。かれらを愛する時、あなた自身も自然に、かれらの喜ぶものを愛し、喜ぶようになっていくのです。そして、愛はあなたに、小学部下級の子供たちが、どのように行動し、考え、感じ、反応するか、かれらの好き、嫌いは何であるか、ということをも理解するようにさせてくれます。そして、その理解をもつ時に、あなたは、かれらの中に立ち、かれらの必要に答えるために最も必要なことを、言ったり行ったりすることができるようになります。あなたこそ、かれらの考え、行動に影響を与えるのです。かれらを常に愛し、祈り深く、またかれらの状態に十分に注意を払いながら、かれらをイエスに導くように努力するならば、かれらはきっとそれに応ずるようになるでしょう。そして、実際に子供たちの手をとって、キリストの前に、かれらをぬかずかせ、導くことができるようになるのです。

ですから、もしあなたに本当に教えたいという願ひがあるならば、心を開いて主御自身の愛を受け入れるべきです。主の愛に満たされる時、愛らしくなく、好ましくないと思われるものが、あなたの思いから、全く拭い去られてしまいます。あなたの思いが神の愛と教える子供たちとによって、全く捕えられていく時、その愛は、忍耐、親切などの徳によって、現われるようになるのです。あなたは自己中心でなく

なり、喜びに満ちた、常に勇氣のある、しかも礼儀正しい人となるでしょう。こうしてあなたの愛によって子供たちは、キリストのもとに引き付けられていくのです。

次にあげる条件は、信仰です。

教師は神に対する揺がない信仰を持たなければなりません。パウロは嵐の荒れ狂う海の中で「わたしは神を信ずる」と言いましたが、その信仰がパウロを、難破から救ったのです。かれは神が自分をこの働きのために召して下さったことを確信し、この神は必ず守り給うと信じたのです。あなたは、小学部下級の教師として、自分の行い働きの、キリストに仕えるのに最も優れたものであると考えていますか。あなたは神の力と、みことばに頼っているでしょうか。もし、頼っているならば、あなたの、主の御名にふさわしい教師だと言えるでしょう。もし、そうでないならば、あなたは、名前だけの教師になってしまいました。信仰が深められるように祈りましょう。そして、信仰の成長と同時に教える喜び、楽しみが、大きくなっていくのを体験して下さい。

よい日曜学校の教師となるために、必要なもう一つの条件は、祈り深いことです。それは肉体の成長のために、食物が必要であるように、靈的成長のために無くてはならないものです。祈る人は、直接、神と交わることができ、神の偉大な祝福の源に近づき、神の助けを得ることができるようになります。祈りによって、教師は神の助けを得、少年少女の魂に迫り、彼らをキリストに結びつけることができます。祈りによって、教師は神の働きを行うに当っての導きと、知恵を受けることができます。そして、小学部下級科の生徒を、主の願ひの通りに教えるようになるのです。祈りによって、神の無限の愛がわたし

たちに流れて来、また、わたしたちを通して、わたしたちの教える子供たちにまで、及んでいくのです。また、祈りによって、クリスチャンの品性に必要な、喜び、平和などが、わたしたちのものとなってまいります。


祈りによって奇跡が行われ、祈りによって教師は、自分の最善を尽して、神の最高の栄光を表わすことができるのです。すべての教師は、日々、規則正しく、祈るべきです。その祈りも、イエスとのさらに深い交わりを得るためのものであり、また、神の国の働き、特に、自分の受け持っている少年少女たちのため覚えて祈るといふものでなければなりません。教師はさらに、子供たちとの接触到に必要な知恵と導きを熱心に祈り求めなければなりませんし、学課を教えたり、準備したりするためにも神の助けを求めるべきです。そして祈る時には聖書に記されている祈に関する教えをよく記憶し、それに従うべきです。テサロニケ人への第一の手紙五・一七、ヘブル人への手紙四・一六、ピリピ人への手紙四・六。

わたしたちは多く祈り、自分の最善を尽くして、結果を神に委ねるべきです。ここまで、わたしたちは日曜学校教師の霊的条件について調べてきましたが、他の人間的条件を続けて調べてみましょう。

教師に必要な条件として考えられることは、指導力です。教える全課程を知的に計画し、かしこく導いていくために、この条件がぜひとも必要なのです。それは、ビジョン、成熟した人格、人を助ける気持、正しい判断をする能力、生徒の行動を指導できる能力、熱心、勇氣、働きに対する興味などをもっていることです。また、働きに対するはつきりした理解がなければならぬし、それに対する完全な献身的努力

力というものもなければならぬのです。指導力を持っているということは、他の人々を自分ではなくキリストに導いていく能力がある、ということの意味するのです。

以上あげた、良い日曜学校教師となるための条件を全部備えている人は、そう多くいるものではありません。それは大変高い標準であることはたしかです。しかし、霊的に、また知的に向上するためには、どんな犠牲も惜しまず、人格の形成のために喜んで努力をする人には、容易に到達できる標準でもありません。

教師には絶えざる成長と勉強が必要です。本当の教師は、学ぶ教師です。もし、勉強をやめてしまえば、その教師は沈滞してしまいます。実際に教師は、生徒以上に絶えず学ぶ人でなければなりません。教師の学ぶ方法はいくつもあります。まず、注意深く準備することによって学びます。また、自分の働きに関係のある書物ができるだけ多く読むことです。そして、教師の養成講座や教師会には、必ず出席することです。また、自分の教えるクラスから、種々の知識を得、生徒自身について新しいことを発見していくこともできます。絶えず自分を向上させていかなければならないということを意識している教師は、新しい教授法や教材、プログラムなどに、いつも注意し、調べてみる気持があるものです。しかし、すべてのことにまさって、神のみことばを絶えず学ぶことによって、教師は学び、成長してまいります。それはただ単に聖書についての知識をもち、聖書の外見だけを理解することではなく、聖書を毎日秩序立てて注意深く読み、祈り深く学んでいくことによって、そこに示されている真理を得ていくことなのです。そのような聖書研究は、非常に有益なものですから、教師は、自分の持っている地図、コンコルダンス、

表、注解書、辞典などというものを、全部利用して学ぶようにするのです。教師は神のことばを解釈し、注解していくことが自分のつとめであるということを覚えて、そのために良く学び、また学ぶことによつて、自己を整えていく必要を自覚しなければなりません。勉強を続け、成長をしていく教師は、パウロがテモテに命令した「あなたは真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない錬達した働き人になって、神に自分をささげるように努めはげみなさい」(テモテへの第二の手紙二・一五)ということばを文字通り実行していることになるのです。

きちんとした身なりは、日曜学校教師に必要なもうひとつの条件です。それは、立派な服装をしなさい、ということの意味しているのではなく、きちんとした、汚れない、適当な衣服を着、すべての点に行きとどいた良い趣味をもった身なりをしていることです。もし教師がこのような点において、欠けている場合には、どんなによいことを言っても、かえって反感を買うことになり、良い模範を示すことはできないわけです。教えるわたしたちは、生徒たちが物まねをする者たちであり、教師たちの服装によつても、多くの影響を受ける、ということをいつも念頭においておかなければなりません。

活気ということも、教師にとって必要な条件です。日曜学校の働きを正しく行っていくためには、忍耐、エネルギー、熱心さ、力などが必要なのです。肉体的活力が無いために教師がものうげな態度をするならば、それは生徒たちの態度に敏感に現われてきます。すぐれた健康は、すぐれた健康的な精神として表わされるのです。それは、正しい姿勢、生活に対する情熱、あるいは、生徒たちを鼓舞激励する熱心さにも現われてきます。健康であるということは、熱心、愛、想像力、神と生徒とに対する信仰、その他、

前述した多くの条件を保つために、はかり知れない重要な価値をもっています。教師個人の幸福も成功も、彼の肉体的健康を保つ努力いかにかかっているのです。正しい態度、姿勢というものは人間の肉体的面と非常に密接な関係があり、静かな落ちついた生活のために、なくてはならないものです。健康を保つためには、絶えず意識的な健康の法則を守り行わなければなりません。食べることに、寝ること、その時間、量というものに絶えず注意し、十分に新鮮な空気を吸い、日光にあたり、運動をして、身体の機能を活発に活動するように習慣づけることです。そして、健康を損うような習慣を避けるように絶えず心がけなければなりません。

三、小学部下級科の教師の性と年齢の問題

経験から言うならば、男も女も小さな子供を教える能力は同じです。日曜学校の教師を選ぶ際に、しばしば性別の問題が強調されているのですが、この問題は決定的な要因ではないのです。女の子のクラスには女の教師がよく、男のクラスには男の教師がよいのだという考えはまちがいです。女の教師が男の子のクラスの良い教師になり、男の教師が同様に女の子のクラスで良い結果を見ることが、しばしばあります。

教師の性別より、さらに重要なことは、その教師が子供たちの必要を絶えず考え、応ずることのできる能力を持っているかどうかということです。たしかに、男の教師の成熟した元気さ、男らしさというもの

は、あるクラスには必要なものでしょう。一方、あるクラスにとっては女の教師によって得られる、より静かなやさしい空気の方が必要なのです。ですから、教師を選ぶ時には、教師の性別だけにこだわらずに、各クラスの状態に応じることのできる他の種々の点を考慮してきめなければなりません。

同様に年令の問題も日曜学校教師を選ぶ決定的要因にはなりません。年令の問題が強調されている時には、しばしば他の重要な問題が除外されていることを、わたしたちは見るのです。年令よりも、教師の人格に関係のある種々の要素の方がさらに重要であり、関係が深いということ、わたしたちは多く例から見る事ができるのです。年令以上に教師自身の人格、クラスの中にいる生徒の状態やかれらの必要とするものなど、他の一般的条件がみな、考慮の中に入れられなければならないのです。

四、教師の評価

良心的な教師はみな、自分自身の働きを評価して、長所、短所を良く調べ、見出した短所を是正して行くように努力して、絶えず向上をはかっています。ある教師は、教授法の面で特別な矯正を必要としません。あるいは、より新しい、さらに効果的な授業をするために、ある種の癖を直す必要があるかもしれません。子供たちをより深く理解する必要のある教師もあるでしょうし、また、ある教師にとっては、この働きに関する新しいビジョンをつかみ、再献身する必要があるかもしれません。このような短所は、さらにいくつも考えられます。

しかし、教師自身の自己分析がどのようであっても、心の中によりよき教師になろうという、まじめな願いさえあれば、その教師には成長の望みがあるのです。よい教師は常に自分自身の働きを向上させることを求め、またその方法を捜すよう努力するのです。そして自分の最善を尽した時に、はじめて満足するのです。そのためには、絶えず注意深く、よく学び、献身した状態になればならないのです。

第二章 生徒

一、小学部下級科の生徒

小学部下級の生徒とは、どのような子供たちでしょうか。かれらの特長とは何でしょうか。

このような問題は、教師たちが、実際に子供たちを指導するに当って、知らなければならぬことです。そのために、わたくしたちは、ここでこの年代の子供の一般的特長について肉体的面、知的面、社会的面、靈的面の四つの面から学んでみたいと思います。

そこで、わたくしたちは、極く普通のこの年代の子供を一人とりあげて、四つの面から観察してみましよう。この子供の名前を仮に、明君としましょう。かれはこの年代の子供を代表しているので、別に特別な点はないのです。

明君は最初に会った時は六才でした。その時は児童期の前の部分である幼稚科と、児童期の後期となる小学部上級との中間の小学部下級科の子供になったばかりでした。

明君には、その前の時代の特長が残っていて、特に変化し、成長したと思われる点は見えませんでした。しかし、かれは小学校に入ったので、人生に対してより広い視野を持ち始めておりました。かれには

すでに、人生の最初の大きな冒険の時代が始まったのです。わたくしたちは、かれが日曜学校に来た時すぐに、小学部下級のクラスに入れましたが、このクラスは六才から八才までの子供のクラスですので、かれはそこに三年間いることになったのです。

二、肉体的特長

わたくしたちが明君に最初に会った時、おかあさんが、次のようなことを言いました。「明は最初の数年間は、非常な速さで成長したのですが、このごろは少し成長が遅くなったようです。でも、健康はすぐれているようで、人一倍活発です。けれども時に、足が痛いとか申します。そして、いつもざわめいていて落ちつかなく、時にはいらいらしているようです。このような状態はどういうわけでしょうか。何か特別な注意をしなければならぬのでしょうか。それとも、普通の成長の過程なのではないでしょうか。」

明君をしばらく観察した後、わたくしたちは次のような答をいたしました。「あなたのお子さんの明君は普通の子供さんのようで、ごく普通の成長をしているようです。この時代の子供たちに関するデータなどを見ますとよくわかるのですが、そのデータは、全国の多くの子供たちの研究から得た資料で信用できるものですが、小学部下級の子供たちは、通常、急速な成長をします。しかし、それは、前の児童期の初期に比べると、いささか劣るのです。わたくしたちがとりあつかっている、この三年の間に、普通の

子供ならば、体重が三割ふえるわけですが、それ以前の時代では五割ふえているのです。前の時代には身長は二メートルセントほど伸びたのですが、この時代では、約一二メートル伸びます。六才の男の子は一〇五センチの身長があり、女の子はそれより少し低いようです。六才の時の体重は、身長六センチに対して一キロくらいの割ですが、三年の間に、この比率は少し変化し、四・五センチにつき一キロというようになります。この比率は、その子供たちがよい健康状態にあることを示すものです。」

明君のおかあさんはこれをきいて、あきらかによるこんだようでした。そして「明は一〇六センチ、身長がありますが、体重は十八キロです。ですから、それなら普通ですね。それに、明はとても健康です」と申しました。しかし、少しばかり困惑した表情で、「けれども、あの落ちつかないで、ざわざわしているのは、いったいどうしたことでしょう。これが普通なのでしょうか」というのでした。

これに答えるために、わたくしたちは、次のようなこの時代の肉体的状態を説明いたしました。

「小学部の下級科の子供たちは、自然に、筋肉の運動を要求するのです。ですから、走ったり、跳びはねたりして、体の筋肉を活発に動かす運動をたいへん喜ぶのです。しかし一面、かれらは大変疲れやすく、足が痛くなったり、いらいらしたり、落着かなくなったり、そわそわしたり、注意が散漫になったりするのです。その理由を考えてみると、それは決して心配するような状態ではないのです。」

小学部下級の時代には、体の他の部分に比べて心臓の重さや容量に非常に大きな変動があるのです。心臓の重さは大体、おとなの大きさのたった四分の一なのに、体はおとなの背の三分の二ほどもあるので

す。このような不均衡な成長は、結果的に心臓に相当な緊張をもたらします。それは、おとなの三分の二もある身体全体に、四分の一の大きさの心臓が、血液を送らなければならぬからです。心臓に対するこの重荷に加えて、さらに動脈が心臓より急速に成長する事実と、この年代の子供たちが非常に活発であるということ忘れてはなりません。

さらにここに、肺活量の問題があります。この年令の子供の肺活量は比較的少ないのです。男の子の方が女の子よりいくらか多いようですが、長時間の運動は不可能です。

足の痛みについてですが、これは、足の筋肉があまり丈夫でなかったり、あるいは、運動があまり強すぎる場合には、大抵の人が経験することではないでしょうか。」

これをきいて、明君のおかあさんは気をとりもどしたようです。そして、「それでは、明は、正しい方法で成長させるなら大丈夫なのですね。あの子は十分睡眠をとります。きちんと決めて休みます。それに平均のとれた食事もあります」と言いました。わたくしたちも同様な考えでした。そこで、明君の他の成長の面を見ることにしました。

わたくしたちはある時、明君の笑った時の顔が、なにか、ゆがんでいるように感じました。特にそれは歌を歌った時に、はっきりと現われました。話をする時にも何か口笛を吹くような息のきれる音がしました。それと言うのも明君の歯がぬけたからでした。これは六才から八才の間にひき続きおこる一つの成長の過程で、ほとんどの場合、八才までに終るものです。

明君は、この齒のぬけるといふ表面的変化をあまり意識していないようでしたが、ある子供はたいへん気にします。ですから、教師か親がこのことについて少し説明してあげて、子供たちが、楽な気持ちでこの期間を過せるようにしてあげたらよいと思います。中には、自然的成長に、あまりにも神経過敏になりすぎて、神経的にも好ましくない状態をひきおこし言語障害まで起こす子供もいるのです。

明君が三年間、小学部の下級科に在籍している間に、わたくしたちはかれの筋肉の関連作用が非常に成長したことに気がつきました。六才の時に、かれはあまり優雅な起居振舞ができませんでした。遊戯をしても、ぎこちなく、工作も大ざっぱなものでした。そのためでしょうが、かれはゲームでも簡単な、跳んだり、はねたり、走ったりするゲームの方が好きでした。工作でも、簡単に大きな取り扱いやすい材料を使う工作が好きでした。しかし、三年後には、全然違う少年になりました。手や腕をこまかく動かすことができるようになり、筋肉間の相互関係も発達し、小学部上級科に進むころには、非常に広い範囲にわたって、種々の優れた技能を現わすようになりました。

明君はこの年令の子供たちのかかる病気にかかって、何回も日曜学校を休みました。しかし、これは心配するものではありません。この年令の子供たちの病気に対する抵抗力は大変弱いのです。それは幼稚科の子供たちの二倍ですが、小学部下級科の子供たちが病気に敏感であるということは、多分、以前よりも病原菌にさらされることが多くなったからだと思われまます。しかし、実際に病気になる率は、非常に高いのですが、幼稚科の時代に比べると、死亡率は非常に低くなっているのです。

しかしながら、わたくしたちは、前述したようにこの年代の子供の体の不均衡な成長によってもたらされる疲労状態によって、彼らの増大していかねばならない病気に対する抵抗力が、かえって損われないように注意をしなければなりません。

明君が急速に、竹の子のように、頭の大きさも、手の長さも、胸の長さや胸囲も成長していく時代があります。しかし、その後、しばらくその成長が止って、体の他の部分が成長して追いつくまで待つという状態がみられるのです。内臓も含んで、体の各部分は、それぞれの調子で成長していくのです。成長はリズムカルに行われて、ついに明君は三年前の赤ちゃん赤ちゃんとした状態から全くぬけ出した立派な少年に成長していくのです。三年の間に明君は毎週会っていればこそわかるもの、もし全然会わないならば、見わけがつかないほど成長してしまふのです。

三、知的特長

一般の小学部下級科の子供たちは、どの程度のことを知っており、また、何を考えているのでしょうか。そして、その知識や考えをどのように表現することが出来るのでしょうか。

このような問題を教師はよく知らねばなりません。そうしないと、実際に教えたり、学んだりするこの過程をどこから始めるべきかわかりません。

明君はまた、遺伝と環境の両方の影響を受けて形成されていく一人格であります。しかしながら明君は祖先から受けついだものと現在の家庭環境から受けたものによって、多くの影響をうけているにもかかわらず、彼自身のもつ興味や体験によって、さらに、別個の性格がつけられていくのです。そして、明君が教会に来て教えを受けるようになって、さらに、彼の個性が特色づけられていくのです。

(a) 知識と理解力は次の体験の結果です。

- 見たこと
- 感じたこと
- 触れたこと
- 味わったこと
- 臭いをかいだこと

これらの感覚が鋭く磨かれ、さらに多くの知識を得るために役立つものとなります。かれのもっている興味と感覚が合致しているときに、わたくしたちは、かれのすでに知っている事柄と関係づけながら、新しいことを教えることができるのです。ですから、わたくしたちは、明君が何に興味をもっているかという点と、過去にどのような経験をもっているかという点とを知らなければならぬのです。そこで、一般の家庭にいる六才の子供が体験したことと、興味をもっていることを調べてみると次のようなことが言えるのです。

体 験

- 両親の愛
- 家庭の安全
- 兄弟に対する忠実さ
- 弟妹たちの誕生
- 親戚の死
- 家事
- 自分のものを大事にすること
- 他の子供たちとの友情
- 旅行
- 動物園などへ行ったこと
- 遊ぶこと
- 物語を聞くこと
- 休日による遊び

学校へ行くこと
病氣、など

興 味

飢え、渇きによる肉体的欲求を満たすこと
愛されていて、安全性をもつこと
家、日曜学校、学校、近所の遊び仲間のグループに迎え入れられること
新しいもの、特に動くものを見ること
興味を覚えたものを手で扱ってみること
身体全体を動かす肉体的活動
ごっこ遊びや、想像した遊び
漠然とした神に関する考え、など

(b) 文学的興味

明君は、早くから文章、言葉などに興味を持っておりました。そして、何でも、自分の限られた体験と

結びつけ、それを土台として理解し解釈するようにしたのです。それでたとえば、すでにキリスト教用語としてきまっている言葉には、驚くほどの反発を感じたのです。それは次のようなものです。

血によって洗われる。これに対して、

「僕はいつも石鹸と水で洗うんだ。どうして血なんかで洗うことができるのか。」
命のパン。

「もしイエスさまがパンだったならば、人間なのだろうか。」
天のおとうさま

「ぼくにはもうおとうさんが家にいるのに、おかしいな。義男君は、天のおとうさんが本当のおとうさんでない」とよいな——と言っていた。——義夫君のおとうさんは義夫君に意地悪なんだ。」

わたくしたちは、このようなキリスト教的表現を、明君たちのもっている狭い範囲の経験をもととして、理解できるように説明してあげなければなりません。時には、そのような表現を子供たちの体験に立って、十分に説明することができず使われない方がよいかもしれません。この年代の子供たちは、まじめ、善良、愛、ゆるし、という抽象的な言葉をほとんど理解できません。しかし、体験によって、すでに理解している事柄を用いた例話を使い、実際に示してあげるならば、理解することができます。明君は、「ずるい」ということを知っているのです。ですから、さらに説明を加えるならば「まじめ」に

なるということを理解することができます。また、明君は、優しい母親の親切と父親の優しい守りの手を知っているのです。このような愛の空気が家庭を治めている時、かれは「愛」という抽象的名詞の実的な意味を学ぶことができるでしょう。子供たちにはこの種の思想は抽象的なものでなく、現実的なものとして新しく理解されていくのです。そこで、わたくしたちは、この家庭での真実の愛の体験から出発して、さらに他の形の愛―それは主として、神が明君や他の人々を愛しているということですが―を考えさせることができるのです。

(6) その他の能力、技能

六才の時に、明君は目に見えるものを数えられます。学校に入ると間もなく、かれはさらに、多くの数まで数えることができるようになります。この能力は、小学部下級科のクラスでしばしば、利用できる重要な要素です。

明君は、普通の赤、黄、緑などの色をすぐに認めることができます。しかし、色の区別よりも行動や活動に早く気がつきます。今、何が行なわれているか、だれが行なっているか、ということの方が、これは何色か、ということよりも早く見分けられるのです。明君は、人や物の絵をかくことが好きです。しかしその絵の中には、いつでも、人や動物、汽車、自動車、飛行機などが動いている姿がかかれています。時には、家をかくこともあります。それは家庭というものが、かれらにとって最初の体験だからです。時に

は、静物、木、花、その他の植物などをかきますが、どちらかというとき動いているものの方が好きです。三年たつと、明君の知識や能力は非常に発達してきます。学校、教会、家庭の、さらに広範囲の影響、感化を受けた結果、さまざまな種類の知識が与えられることになるのです。知識の内容も豊富になってきます。

明君は、読み方においても、成長してきました。この時代の後期には、普通の物語りなら速度は早くありませんが、十分に読むことができます。しかし、何かを読んで自分の言葉でそれを要約して言い表わすということは、困難なようです。何かを教えられて、その中から重要なことだけを要約したり、他の不必要なことはとばして言ったりすることはできません。ですから、本を読む時も始めから終りまで全部読んでみなければならぬのです。

書き方の成長は比較的遅いようです。それは筋肉の調整と総合関連作用がうまくいかないからです。写しとったり、自分で何かを書いたり、簡単な口述を筆記することはできますが、聞きながら同時に書く、ということ、書くことにだけに注意全部が向けられますから期待することは無理です。

また、注意力は何に対しても短時間しか向けることができません。この年代の子供たちは、すぐに疲れてしまいますので、長い時間、ある一つのことに精神力を集中することはできないのです。特に、自分から進んで学んだものでないものに対しては、この傾向が強いようです。ですから、興味を感じない時には道草をくって、そのことを完成しないで済ませてしまうようになるのです。しかし、明君が自分で行なっ

ていることが何であるかを理解し、そこから何が期待されているかを意識している時には、比較的容易に注意力をそこに向けさせておくことができるのです。

(d) 想像力

小学部下級科の生徒は、非常に活発な想像力をもっています。それは遊びの中でも、ごっこ遊びによく表わされています。かれらが人生の問題や事件などの細かい部分まで語る物語に対して、非常に興味を感じ、そのためなのです。

刺激的な興奮するような、奇抜な物語を、だんだん後になるに従って好むようになってきますが、反面、明君は、「それは本当、それともただのお話？」と質問するようになります。奇抜な話を聞くことに對して、別に反対するわけではないのですが、ただ作り話かどうかということを知りたがるのです。言いかえてみれば、明君はすでに事実と空想を区別することのできる段階に成長しているのです。かれの理性は成長してくるにつれ、種々の事柄が、この世界において、互にどのような関連性を持っているかということを理解し始めるのです。これは知的成長において非常に重要な段階です。

かれがこのように、自分の住んでいる世界の概念をつかむようになってしまったと言っても、わたしたちは、かれからあまり多くのことを期待してはいけません。小学部下級科の生徒である明君はやはり、論理的な思考をすることは不可能なのです。しかし、原因と結果について知る力があります。なぜなら、あることが

起こって、その結果はこうなった、と実際に見ることができるところです。明君の理性は発達過程のほんの初期の段階にあるのですから、信頼しきるといふことは不可能ですが、一面、これは、のちの彼の行動に大きな影響を与える、正邪、善悪の思想を形作る土台を作っているのです、非常に大切な成長だといふことができるのです。

(e) 善悪の考え

正邪、善悪の思想、正しい、悪いという考えは、明君の中に主として、日曜学校とクリスチャン・ホームの協力によって作られていくのです。日曜学校は主として、教える場としての働きをするものですが、クリスチャンの品性を実際に発揮する機会を、十分に提供することはできません。しかし、家庭はその両方を行うところです。服従に対しては、報賞を与え、不従順に対しては罰を与える、ということを効果的に教えることができるのです。もし、明君が本当のことを言うならば、両親から喜ばれるという報いを受けます。その結果、自分でも満足することができるのです。そして真実を語るといふことはよいことであり、正しいことであるという考えが、無意識のうちに結論づけられていくのです。同様に、明君が何かしなかったために罰を受けたならば、面白くない思い出が、頭の中に植えつけられ、このような不従順は間違いだといふ考えができ上るのです。こうして、種々の体験を通して明君は、正邪、善悪について、はっきりした考えを持つようになっていくのです。

四、社会的特長

明君は、はじめて小学部下級科のクラスに入った時には、まだ赤ちゃん赤ちゃんしていました。全く自己中心で、他の人々のことを考えたり、クラス全体のために貢献しようなどという気持はありませんでした。もちろん最初の日曜日は今まで、自分の知っていた親しい人たちから離れて、新しい環境に入れられたために、そのことを強く意識して涙もろくなっていました。しかし、一年生になって毎日学校に行くことが、だんだんと、かれを自己中心的でないようになせました。そして他の子供たちと交ることを大変、喜ぶようになり、グループ全体の益のためには、自分を二の次に置くようになりました。事実、小学部下級のクラスを卒業して行く時には、非常にグループ意識の強い子供となり、自分たちのクラス、自分たちの日曜学校で行う方法というものに、非常に忠実さを示すようになったのです。

明君は、自分が愛し尊敬する人の真似をする傾向を示しました。たとえば、自分の新しいシャツや洋服が、おとうさんと同じだと言って、よく自慢しました。また、尊敬する年上の少年や父親などの癖もすぐ身につけました。このような傾向は社会的成長の大きな機会となるのです。なぜならば、このことによって、他の人の立場にまで立ち入って考えていくようになるからです。これは、話し方、行動、服装、人格などにおいて、人々の模範となるべき、日曜学校教師にとって、何とすばらしい機会となることでしょう。

う。

明君は、他の人々に自分を認めてもらいたいという気持を強くもちます。それはまた、かれの社会的行動に大きな影響を与えるのです。両親は、明君によいことをさせて、ほめてあげる機会を与えるようにしますが、日曜学校でも明君に朝早く来て、教材の準備をしたり、順序を揃えたり、他の子供たちを歓迎したり、というような小さい仕事を与えるなら、かれは喜んでするでしょう。そして、先生の「明君、どうもありがとう」と言うほほえみをたたえた一つの言葉によって、明君は十分に報いられたように感じるのです。（これはたしかに、日曜学校で、自分を認めてもらいたいために、何かをわざとやるような子供たちを放置しておくよりも、はるかにかしこい方法だと思われまます。）

明君は絶えず限らない興味をすべてのものに対してもっておりまます。かれの周囲の物に対する興味は非常にさかんで、絶えず、見るもの聞くもの、かぐもの、感ずるもの、味わうことのできるものを調べてみようとするのです。このような興味を満たすために発せられる限りない質問は、しばしば、おとなにとっては、おこりたくなるようなもの、いやになるくらいのものでありますが、これは、他の人々と仲よくやっ行くということを学び、そのために自己を調整して行くための重要な要因となっているのです。明君の人格には、驚くような矛盾した面が多くあります。自分より弱い兄弟や、動物などはたいへん大切にします。しかしまた一面、たいへん臆病であると同時に、出しゃばりでもあります。時には、けんかもします。そして、だんだんと、かれの家の垣根の外に多くの友だちをもつようになってきます。また明

君は、手のとどく範囲のものは何でも取り扱うようになります。そして、価値がないと思われるような機械の細かい部分、その他、雑多なものを集めて喜ぶようになります。

これまでの明君の世界は、家庭という壁にかこまれた所でした。そして、家族の人や、数人の外部からくる人たちが、かれの社交性の欲求を満たしていたのです。けれども学校に行くことによって、それは変化したしました。かれの新しい世界は、新しい自分と同じ年齢の友達や数人のおとなたち（主として教師）によってつくられていくようになるのです。

学校や日曜学校において明君は、自分自身に頼り、規則に従い、他の人々と仲よく過していくということを学ぶようになります。要約すれば、明君は、この時代に人生に対して自己を適応させていくことを学ぶのだ、と言えるでしょう。そのためには、日曜学校、小学校、家庭がそれぞれ分担して責任をもたなければならぬのです。

五、靈的特長

明君の活動は他の子供たちと同じように、自分で善悪をわきまえ、靈的なことを選択できるようにするまでは、よくもなければ悪くもないのです。簡単に他からの影響を受けるので、靈的特長も、それに応じて成長していきます。この環境に対する興味と、非常に活発な想像力とを合わせて用いることにより、わ

たくしたちは創造主である神を信じ、すべてのよきものを与えたもう神の摂理、すべてのもののおかげにある神の偉大な力を、容易に受け入れさせることができます。明君は愛に対して感受性が強いので、すべての子供たちを愛してくれる救い主であり、友であるイエスの愛を受け入れ、その愛に応じて熱心に主を愛するようになります。明君は、たぶん靈的なことは多く理解することができないでしょう。

しかし、それらのものに非常にはっきりした反応を示すので、きっと、いつまでも残るような強い印象が、その心の中に植えつけられるのでしょう。ですから、この初期の形成時代に、愛の神が無意識のうちにはっきりと印象づけられることは大切なことで、わたくしたちは、これを決してないがしろにしてはならないのです。

六、結論

(a) 小学部下級科の子供たちの特長である活発さの原因は、絶えず行なわれている肉体的変化によるものです。ですから教師は、これを理解し忍耐しなければなりません。

(b) 子供たちは、すでに知っていることを土台として学びます。ですから、かれらがすでに知っている事実を通して、新しい事実を示すようにするのが効果的な教授法です。

(c) かれらの自然的、肉体的限界と能力を理解することが大切です。かれらの能力以下のものでも、そ

れ以上のものでも、子供たちに強要することはよくありません。

(d) 小学部下級科の年令は自己中心的な赤ちゃんの時代から、グループ意識をもつ時代に移行していく中途の期間です。両親、日曜学校の教師、学校の教師たちは、常にこのことも注意して、かれらに必要な助けを与えて、これを発達させてあげなければなりません。

(e) 小学部下級科生徒の霊的成長は、指導者が神をはっきりと、しかも実際的なものとして示してあげることによって、助長されていくものです。

(f) 年令ごとに、それぞれの特長がありますが、子供たちは皆、一個の人間として、それぞれ違った特性を持っていきます。ですから、あなたの日曜学校の子供を助けてあげようと思うならば、かれらを個人的に細かい点まで知るようになければなりません。

第三章 生徒の成長発達

前の章でわたくしたちは、小学部下級科の子供の姿を、肉体的、知的、社会的、霊的な特長を描き出すことによって、大づかみに知ろうとしました。わたくしたちは、彼らを分析することによって、よりよく理解しようとしたのです。彼らの性質を、よりよく理解するならば、それだけ、わたくしたちの教える目的もはっきりしてくるわけです。

この年令の子供たちを、わたくしたちが十分に助けることができるかどうかということは、彼らの性質を真に理解しているかどうかということにかかっています。事実、それは、かれらの性質を十分に理解するとうりだけでなく、かれらを人として、人格として、愛をもって認めるということにかかっているのです。もし、わたくしたちがこのような態度をとるならば、子供たちもわたくしたちの態度をすぐに感知して、わたくしたちの与えようとしている建設的な感化というものを、喜んで受け入れるようになるのです。

それならば、わたくしたちはどこから始めたらいいでしょうか。生徒たちのどの面の成長をわたくしたちは強調したらよいでしょうか。日曜学校の責任はどこに置かれているのでしょうか。

実際の働きをするために、わたくしたちの立場を次のように考えましよう。わたくしたちは、わたくしたちの問題の複雑さに気がつきませう。が、同時に、わたくしたちは学校と家庭と共に共同の責任を持っているということも認めるのです。しかし、日曜学校は小学部下級科の子供たちの、神や他の人々との正しい関係を発達させていくという分野において、重大な責任を持っている事実を知るので、ですから、ここでわたくしたちは、宗教と社会的発達について、さらに見てみたいのです。

一、宗教的発達

人格というものは、互いに織りあわされた布地のようなもので、人格を形成しているある一つの面は、他の面と密接な関係を持っていて、どれか一つだけとり出す、という具合にはいきませぬ。宗教的発達も、他の人々と仲よく生活していくという社会的面と密接な関係を持って発達していくのです。そしてこの両面は互に関係を持ちながら、人格を形成するのです。しかし、ここでは、生徒をよりよく理解し、助けを与えることができるように、実際的に有益な結論を引き出すためにあえて、これを別々に分けて調べてみることにします。

(a) 日曜学校の責任

イエスの教えに従い、健全な宗教的訓練が行なわれている家庭から来る子供たちには、日曜学校の働

きはよりたやすく、また、効果的になるものです。しかし、それとは逆な家庭から来ている子供たちの場合には、わたくしたちには、さらに大きな使命が与えられ、大きな責任が負わされていることになるのです。わたくしたちは神の恵みによって、この逆の勢力に勝利して、イエス・キリストを受け入れ、従っていく決心をするようになるまで、彼らの中に正しい態度を植えつけていく必要があるのです。

(b) 日曜学校小学部下級科クラスの出発点

まず、イエスの心、すなわち、教師と生徒の間の愛が感じられなければなりません。この愛と友情は徐々に成長して、互いに仕事を分かち合い、同情し合って、理解し合っていく関係、交わりにまで成長していくのです。イエスの心は、日曜学校を楽しいところとし、子供たちを、そこにひきつける働きをいたします。また、この心は小さな子供がその暖かさの中に成長していくにあたり、彼らを一つにとかし、祝福してくれるのです。こうして、イエスとの交わりが子供たちにとって、リアルなものとなってくるにつれ、わたくしたちは、彼らの理解できる簡単なことから始めて、むずかしい問題にまで教え導くことができるようになります。スタートさえよければ、わたくしたちは、彼らを一步一步教え導くことができるのです。

(c) 教師の態度

これは、正しい生徒の発達のためには基本的な問題です。これは、第一章の中心的主題の繰り返しとな

りますが、あえて申しましょう。

まず愛が教師の生活を支配していなければなりません。そして、謙遜、神に対する熱心な愛、子供に対する愛、彼らを助けてあげたいという熱情がなければなりません。また、神の愛の管となり、よき奉仕者となることができるように、絶えず祈り深い態度をもっていなければなりません。

教師の生活の中には、消極的な要素が一つも残ってはいけません。たとえば、人の好き嫌いや、忍耐ができないこと、不誠実、不忠実であること、不公平であること、などは、全部とり除かれていなければなりません。たとえ、どんな高度の訓練を受け、十分に準備をしたとしても、このような否定的態度があるならば、せっかくのよいものでも、効力を失ってしまいます。愛の暖かさを伴わない教育は、目的を達成することができないのです。それは、教育のもたらす有益な点がまだ熟さないうちに、愛のない冷たさによって凍ってしまふからです。良い教師というのは、邪魔な働きをする否定的な態度を一切追い出して、その名前にふさわしい教師になるように努力する人ではないでしょうか。

(d) 小学部下級科の生徒に求めたい態度

わたくしたちは小学部下級科の生徒の中に、愛というものを育成したいと思しますので、愛を構成しているものを、幾つかの部分に分けて考えてみましょう。それは、非利己的であること、忠実であること、柔和さ、真実さ、忠節、喜び、忍耐、寛容などです。前述したように、小学部下級科の生徒は、たいへん

言葉に興味を持っています。ですから、いまあげた愛の構成要素の一つ一つをできるだけ抽象的でなく、実際的に考えてみましょう。そうすれば、子供たちに神の愛を教える時に、実際の行動、活動から例をあげて、理解させることができるようになるでしょう。

愛とは非利己的なものです。非利己的であるということは、互いに分かち合うということであり、他の人に親切にするということでもあります。また、病人や苦しんでいる人たちに同情し、他の人の幸福を喜ぶことです。また、その中には、牧師、校長、教師、その他の指導的立場にある人に感謝をすること、家族の人々に対する愛情、近隣の人々に善意をもつこと、人種や民族の相違を越えた兄弟愛、経済事情も宗教事情も取りこえてできるだけ調和することをも含まれています。

愛は忠誠を意味します。忠誠とは、常に神の命令に従い、神が求めておられるような人間になり、神の喜ばれることを行うように時を捧げ、努力するということであり、神の教会を通して行われる神の働きを援助するために財を捧げることであり、教会以外の機関を通して、社会福祉のために寄附をしたり、教会に欠かさず出席すること、教会の中では、敬虔にすること、約束はきちんと守ること、両親や友人に親切にすること、などを含むのです。

以上のようにわたくしたちは、愛を構成する各要素をさらに詳しく、広範囲にわたって説明することができます。ここで述べたことは、子供たちに意味をはっきりさせるためにあげたほんの一例にすぎません。献身しきった注意深い教師は、愛を実際に子供たちの生活に適應させるために、自分でより多くのも

のを考え、子供たちが現実的に受け入れるように指導していくのです。

(e) 目的の達成促進の方法

わたくしたちのもっている目的を發展させるために必要なことは、わたくしたち教師側の注意深い準備です。この準備は靈的な準備と實際的な準備の二つに分けることができます。また、注意深い正しい適当な学課の教え方も必要です。学課を教えるということは、生徒たちに見たり、聞いたり、また行なったりして学ぶ機会を提供しなければ完全とは言えないのです。

生徒活動。生徒の實際活動の中には、教師と生徒が共に計画したものも含まれます。そして、これらの活動は、学課の目的としている真理を實際的に表現するものでなければなりません。注意深い教師は、生徒活動の中で突発するどのような状態をも、全部利用して学課を補なうことができます。このように、生徒が自分たちで活動するということは、実験することによって学ぶという研究室の働きと同じ原理に立ったことで、彼らの必要を満たすこととなります。

最もよい教育は、強力な目的をもち、注意深く計画をたてた生徒活動が行なわれた時にできるのです。教師が生徒に実際に行うことによって学ぶ機会を与えることにより、教師は彼らが偉大な真理を實際的に理解するように導くことになるのです。そして彼らが、真理を實際の活動に表わすことによって、それは彼らの習慣となり、人格が形成されて行くことになるのです。行うことによって学ぶことは、あらゆる状態のもとでできるのです。

小学部下級の子供たちに適当だと思われる活動のいくつかをここにあげてみましょう。

日曜学校に新しく来た子供に親しくしてあげること。近所に新しく来た子供や、学校に新しく来た子供に親しくしてあげること、これは日曜学校に招いて歓迎してあげることを含むかもしれません。

異った子供たちによくしてあげること。これは貧しい身なりをしている子供、不具の子供、他の国籍をもっている子供などに親切にしてあげることかもしれません。

病人や困っている人に同情を示すこと。これはお金をあげたり、花やその他の喜ぶものを分けてあげることの意味するでしょう。

老人に尊敬を払うこと。子供たちは、年寄も他の友だちと同じように、よい友だちなのだということを学ぶことができます。それは主の命じられた教えに従って、ごく普通の親切を示すことによって体験できるのです。

神に祈り信頼すること。子供たちにとって信仰は自然なものですから、毎日、規則正しく祈るようになさるならば、それはぐんぐん成長いたします。その祈りは、神の恵みに対する感謝や、他の人々の必要のため、また自分自身の必要のための祈りです。

神の家での礼拝。礼拝をしたいという願いと礼拝する習慣とが一つになるまで、絶えず敬虔さを訓練し行わせるようにするのがよいのです。これは教育の中でも最もすばらしい部分で、すべての日曜学校の教師が自分の生徒たちにするものの中でも、最も重要なものの一つなのです。

二、社会的発達—他の人々との折り合い

子供たちが人生において、まず学ばなければならないことは、どのようにして、他の人々と仲よく生活していくかということです。これは彼らの社会的発達の一面です。この発達の始まりは、六才以前の幼稚科にいる子供たちの中にも、すでに見かけることが出来ます。普通には、小学校に行き、日曜学校の小学部下級科のクラスに入る六才頃にこの始まりを見出すのです。

「学校生活（日曜学校生活もそうですが）では、家庭とは違う教育訓練がなされるので、その結果「グループ意識」が出来ます。そしてそれは規則を守ること、持物の整頓、他の人々の権利の尊重、就学前の子供に見られないような自己節制など、よい結果を生み出します。「学校では」あるいは「わたくしたちのクラスでは、これはこういう風にやります」という考えが、小学部下級科の生徒たちの考えや行動に大きな作用を与えるようになります。

注意深い日曜学校の教師は、小学校が子供たちの社会的発達のためにしてくれる重要な貢献について感謝します。なぜなら、一週間の間に学校が成し遂げてくれたことは、日曜日に日曜学校で学課を教える時の基礎として非常に、価値あるものとなるからです。たしかに日曜学校の教師が子供たちといっしょに過す時間は、小学校の教師よりもはるかに少ないのです。しかし日曜学校の教師は、小学校で行なっているように生徒を実際の活動に参加させることによって、正しい方向に導いていくことが出来ます。この

ような実際の活動は、何回かの日曜日にわたって、クラス全体で行うようにすることも出来ます。それは子供たちの社会的発達を促すもので、他の子供たちと仲よくやっていく能力を植えつけ、さらに成長発達させてまいります。

ここでわたくしたちが主張している方法は、決して勉強の内容によって左右されるものではありません。内容は異なっても、グループ活動で行わせるこの方法は同じようにできるのです。ですから、クリスチャン生活の訓練をするにあたって、重要な、正しい社会行動というものは、主として他の人々のことを考える正しい習慣を形成することによるのです。この正しい習慣をつくりあげることが根本的に重要で、休日、祭日などを守ることに、クラスに初めて来た人たちを礼儀正しく迎えることなど、益となる種々の活動を考えなければなりません。（宗教的発達の項、参照のこと）

三、クラスの計画の開始と育成方法

人格の形成と宗教的発達を導くキリスト教的原則は、無限に実際的方法で教えることが出来ます。どの学課にもその可能性はそれぞれあるわけです。しかし、この可能性を学課の中から見いだしていくのは、わたくしたち教師の務めなのです。グループの益と、神の栄光のためには、自らを小さくしてでもやって

いこうという、人生の道を教えることが、わたくしたちに与えられている務めなのです。

教師が常に守らなければならない原則は、子供たちが自分たちで計画をたてているのだと考えられるようにさせてあげることです。ですから、彼らの必要を感じて、子供たちに、その日の学課の目標としていることと関連のあるものを考えさせるようにする機会と環境を与え、そのようにしむけていくのが教師の仕事なのです。

(a) 教会内での敬虔さの奨励

教会の中と同じように各クラスの教室でも敬虔さは必要です。ですから教師は日曜学校の学課を土台として、生徒と話し合いをし、何かの計画をたて、そのことによって神の家に対して敬虔な態度をとる気持ちを成長させるように導くべきです。または、教師が単刀直入にこのことを示すことも考えられます。

そのためには、静かな音楽と他の礼拝のしきたりからはじめて、神が、神の家で人々がどのようにふるまうことを求めていらっしやるかを、砕けた調子で話し合うようにするのです。あるいは、最初の提案は教師がしなければならぬかもしれませんが、子供たちはすぐに続けて、静かにすること、ささやいたり笑ったりしないこと、歌を歌う時には全員が歌うこと、行儀をよくすること、新しい人を歓迎することなど、多くのことをつけ加えることでしょう。

子供たちが神を自分たちの理解できる方法で敬うことに興味をもち始めるならば、理由を示さなくても、ただ敬虔にしなければならぬというよりも、はるかによい結果を生み出すこととなります。このように

して、彼らに敬虔さをもつように求めるならば、彼らは喜んで協力するでしょう。

次には、一同で計画した活動を実際に行う機会を与えるようにしなければなりません。そして一人一人の子供が、自分の責任を感じるようにしむけて下さい。ある子供には、敬虔さをもたせるために、何かの働を与えた方がよいかもしれません。そのことによって、あなたのクラスの問題児の問題を解決することができるかも知れません。何をあなたのクラスの活動とすべきかということは、あなたのクラスの必要とするものが何であるかということによって決められるのです。その一例をあげてみると、日曜学校の時に入口のところでは子供たちを迎え入れる歓迎委員を子供たちの中からつくることです。特にこれは新しい子供たちを受け入れるために有益です。また、ある子供に教材、カード、新聞などを配布する仕事を与え、他の子供には他のこまごまとした仕事を言いつけるといふようにすれば、種々のことでクラス全体が邪魔され、気が散るといふことも少なくなるでしょう。

このような正しい態度は、日曜日毎に絶えずもち続けるように努めなければなりません。しかし、それは愛をもってきちんとやらなければなりません。そして正しい習慣と態度が完全につくりあげられるようにすべきです。子供たちには、自分たちが協力したから、この計画が完成できたのだ、と感じるようにさせるべきです。それは事実、そうなのです。

(b) 工 作

今、あなたはイエス伝を何週間かにわたって教えているとしましょう。あなたは多分、各学課の中のあ

る情景を特に描き出したと思うようになるでしょう。それは、そのことによって、子供たちの態度と行為に好ましい結果を生み出すような真理を強調することができると考えるからです。そして、何か工作を考えたらいいのです。それは子供たちが芸術的作品を作るためではなく、学課で学んだ真理を発表させる一つの手段として考えるべきものです。

このような活動は何週間か続けてやったらよいでしょう。グループで絵を毎週かいていくのもよいと思います。そうすれば、一連の絵が毎週でき上がっていくことになり、しかもイエス伝の中の各事件を表わすものとなるのです。この絵は画用紙にかかせて集めておき、後で綴じてもよいし、あるいは、貼りだしてもよいのです。これは子供たちの本当の努力と思想を表わす興味深い記録として残っていくのです。それはまた、イエス伝を思い返し、ほんとうに真実であり、愛に満ちたかたの模範的姿を子供たちの心に絶えず思い出させるものとなるでしょう。

教師は刺戟を与え、激励をし、必要なものを与え、導き、相談相手になる人です。ですから、教師は子供たちが計画をたて、それを実行できるように、基礎となるアイデアを与えてあげなければならないのです。

この工作の計画は、日曜日に行うべきです。まず、物語のどの情景を示すかをきめなければなりません。そして、子供たちが一緒に書くための細かい点を語り合う必要があります。そして、誰がどの部分をかかかということもきめなければなりません。もちろん、絵の内容はそのクラスの大きさなどによってき

められていくことになるでしょう。

適当と思われる題材

マルタが主のために食事の準備をしている情景

子供たちがしゅろの葉を振りながら道を歩いている情景

イースターの情景

これには、生きたもの、たとえば花が咲いている情景、うれしそうな子供たち、歌を歌っている小鳥などを加えるべきでしょう。

注意すべき点

大きな絵をかくようにすること。小学部下級科の子供たちは、まだ筋肉の関連作用が十分でないので細かな仕事をさせてもだめなのです。

テーブルのような平らな場所を準備すること。

色をぬるクレヨンを準備すること。

子供のかいたものを比較しないこと。

子供たちにその絵の保存方法を考えさせること。

実際に注意深く保存しておくこと。それは壁にはってよいし、あるいは、毎日曜日に復習のためにそれを見せるようにしてもよいでしょう。

この計画が実際に有益な結果をもたらすまで続けるようにすること。しかし、やり過ぎてはいけません。決して不注意な絵をかかせてはいけません。乱暴に絵をかくのでは、初めの目的が達成されないからです。

四、宗教的、社会的発達のための他の直接的方法

注意深い日曜学校の教師は、生徒たちの成長発達に種々のものが関係していることに気がつきます。もしそれらが積極的なよい影響を与えているなら、教師はそれを援助するべきですが、もしそれらのものが悪影響を与えているならば、教師はそれを退けるようにしなければなりません。このようなものうち最も主なもの、家庭です。

(a) 家庭は生徒たちに影響を与える最も重要な場所です。すべてのことの第一印象を与えるのは家庭です。子供の宗教的教育を家庭でするかしないかということは、子供たちの人格を永久的にきめてしまう問題です。家庭こそ他の人々と仲よく生活していくことを子供に教える場所なのです。賢い親は、子供たちが家庭外の世界と接触をもち、他の人々を愛し助けることを実際に学べるような小さな、責任や仕事などを子供たちに与えるものです。

日曜学校の教師と子供の親たちが互いに知り合って、互いにもっている共通の目的を認め合うならば、協力することができるようになるでしょう。同じように子供たちの祝福を考え、関心をもつことにより、子供たちにより影響を与えようとする感化力も強められるのです。

(b) ラジオ、漫画、ちょっと耳にした会話、映画、テレビなどの影響を見逃がすことができませぬ。これらのものは、ここにあげなかった他のものと同じように、子供たちを悪に導くと同様に、善に導く可能性をもっていることを、教師も親も認めなければなりません。この可能性を認めて、はじめて教師も親もこれらに対するはつきりした態度をもち、それに従って子供を指導することができるようになります。早くからこのように指導するならば、後になっても、好ましくない態度や行動は出てこなくなるのです。なぜならば、初期につくられた正しい考え方と正しい習慣は、その後長い間、種々の環境に対する反応を決定していくからです。

このような態度がどのようにしてつくられていくのか、ということについて、わたくしたちはあえてここでは語りません。また、わたくしたちは、人間が進歩してきた結果、作られた今日のさまざまな利器が悪影響のみを与えるものだと考えませぬ。それらのものはそれ自体、中立のもので、それが益になるか害になるかということは、そのものの使用目的を正しく理解して使うかどうかということにかかっているのです。ですから、親も教師も常に注意して、実際に行われているものを観察し、正しいものを理解できるように、賢く子供たちを導き、前にあげたようなものを通して絶えず現われてくる、人格形成に影響

を与える種々のものの中から正しい取捨選択ができるように助けてあげなければなりません。

五、要 約

小学部下級生の社会的、宗教的発達に関して語ってきたことは、結論として次のようになります。

小学部初期の時代は、キリスト中心の生活の基礎となる強い習慣態度をつくる重要な時代です。この発達を助けるあらゆる機関（家庭、日曜学校、小学校その他の施設）は、この重要な働きのために協力して努力すべきです。これはある特定の人ではなく、すべての人の働きなのです。

日曜学校の教師は、自分の働きをおろそかにすることは神の御目的に反することであり、また、魂をキリストから、そして神の国から失っていくことにもなるということを、新しく認識しなければなりません。日曜学校の教師は、魂を導き、人格をつくりあげ、神のこぼれを示していくという働きに、自分が忠実であることが、神の栄光を表わすことになるということを新しく認識すべきです。そして、生徒の成長を促すこの働きを絶えず忠実につとめていくならば、成功が約束されているということを覚え、元氣を出していただきたいのです。なぜなら、必要なら、神は必ず助けを与えてくださるからです。

第四章 教授法

一、教授法を心得る重要性

すべての事にはそれぞれ適当な手段、方法があります。料理、裁縫、農耕、細工など、どれを取りあげてみても、よい働きをする人は、その方法を十分に心得ている人たちです。

同様に、よい日曜学校の教師とは、聖書の学課、生徒についての知識、学課の目的としているものを知ることに加えて、それらのものをどのようにして教えるか、という教授法を知らなければなりません。教師は、自分が知っていることを、他の人たちにも分け与え、それが彼らの中で実際のな、そして効果的なものとなるようにしていくために、彼らを刺激し、激励し、学びとっていくように指導する方法を知る必要があります。もしそれができないならば、彼は教師として落第です。なぜなら、だれも教えたことを学びとってくれないならば、教えたことにはならないからです。学習というものが何であるか、また、その指導法を知らねばならないという責任を感じる教師は、賢い教師です。

二、教授法の場

本日の学習は、どのようにして完成されるのでしょうか。これに対する答えは、学習が行われる方法や時間に関する理解を土台としてつくられた適応性のある方法を用いることです。それは個々の生徒の必要とするもの、興味、能力などが完全に満たされるように、学課の内容、教材、また活動を取り扱っていく方法を教師が形づくるのだということです。真の教育というものは、このような方法でなされるのです。教えたことのある人なら誰でも、これがただ一つの絶対的教授法で、これ以外に方法はない、などというようなことは思わないはずで、方法はたくさんあるのです。どんなによい方法でも、一つの方法がすべての場合に適応できるわけではありません。教える環境や状態は常に違います。また、教える過程も、各グループにより、また個人によって違うのです。方法は幾つもあるのです。しかし、それらはみな学習の原則の上になてられたものですから、それぞれ、生徒たちの実状に応じて、最も適当だと思われる方法が用いられていくべきものなのです。

この場合、どの方法を用いたなら、最もよい結果を生み出すことができるだろうか、という問題に直面している教師は、まず根本的な学習の原則を知る必要があります。そして、そのために利用できる種々の方法と、その実際的使用法を知らなければならぬのです。そして、学課の計画をたてる前に、一体、自分はここで何を目的としているのだろうか、この目的を達成するためにどのような方法がよいだろうか、どのような活動を用いたならば、この教えを一人一人の生徒にはつきりとのみこませることができだろうか、という質問に自分で答えることができなければなりません。そこで、わたくしたちはこの章で、

多少、理論的ではありますが、教授法について学んでみたいのであります。

三、教授法に関する不変の根本的原理

教授法の研究に夢中になる前に、わたくしたちは学習の基礎となるいくつかの根本的な原則を考えてみたく思います。これらはいつも変ることなく、信頼できるものです。なぜなら、それは過去の各時代や現在の時代に働いている人間の頭の働き方を理解するのに役立つものだからです。そのことによって、わたくしたちが教えている場合に何かが起こったとしても、わたくしたちは、すぐにそれに適応する最善の方法を用いて、効果的に授業を続けることができるようになるのです。その原則とは次にあげるようなものです。

(a) 準備された状態

すべての状態が頭の活動にちょうどよい状態にあり、また、学びたいという意志がある時に学ぶことができるのです。

(b) 体験

何でも繰り返せば繰り返すほど、やさしくなってきました。ですから繰り返しは学習の部分です。

(c) 結果

結果的に満足をしたものは、不快な思いをしたものよりも、よく記憶されます。さて、これらの根本的な学習の原則を実際に適応して、わたくしたちの働きにそれがどのような結果をもたらすかを調べてみましょう。

(a) 準備された状態

賢い教師は、一つの学課を子供たちの中にはっきりと植えつけるために、まず、彼らがそれを受け入れる準備ができるように種々の方法を用いて指導するように心がけます。それというのもこれが絶対不可欠の条件であり、生徒たちが学課の本体を受け入れる態勢を整える方法であることを知っているからです。準備がされた時には、教えられた学課はその生徒個人の生きた体験となります。そして、このような心備えができた時に、教師は生徒たちの注意力を学課の中心主題に向けることができるようになります。もし、彼らが興味をもたないならば、その学課を教えても結果は失敗に終わってしまいます。

この学習の法則を心得ている賢明な教師は、この心備えができるようにさまざまな方法を用いて努力いたします。それは、歌を歌うこと、気楽な会話をすること、視覚教材を用いること、復習すること、

などです。方法はどれを用いても、目的はただ一つ、学習をする、受け入れやすい状態をつくり出すというところで、変化はありません。そのためには、邪魔する思いを取り除き、秩序だった、目前の真理に全精神を傾注して、迫っていくことができる状態を作らなければなりません。

たとえば、教師が暗誦聖句を彼らの日常語に訳して、その意味をはっきりと説明してあげるなら、子供はその暗誦聖句の意味することを実際に知り、また自分の生活に、適応することができるようになります。その聖句は、子供にとっても興味深いものとなり、また意味のある言葉となり、理解をもって暗誦することになるので、将来、必要なときに、実際の働きをするようになるのです。

(b) 体験

体験の原則、すなわち、繰り返しということとは、よく、ないがしろにされています。また多くの教師に、間違っていて用いられているようです。それは、この心備えの原則が体験の原則と共に働くというのを無視していたからで、暗記をさせる時でも、無意味な繰り返しをさせてきたのです。これは在来の教育方法の中でしばしばおこなわれてきたあやまちでした。

この学習における体験の原則は、正しく用いられるなら、やはり効果的な方法なのです。繰り返すことによって、事実が頭の中にはっきりと植えつけられ、習慣が形成されていくということには、何らの疑問をさしはさむ余地がありません。たしかに、わたくしたちは行うことによって学ぶのです。

日曜学校の教師は、この体験の原則を用いることにより、生涯、積極的な、正しい態度をもつことができるような強い人格と思想をもつ生徒をつくりあげることができるのです。賢明な教師は、他の学習の原則と共にこの原則を応用できるような授業の計画をたてるように、常に注意深く調べるものです。

(c) 結果

この部分では、あまり多くのことを言う必要はないでしょう。人間は自分が満足を感じたものを繰り返し返す傾向をもっています。また逆に、不快のものを避けようともします。日曜学校において興味深い学課や楽しいことなどを体験した子供たちは、そのようなものを再び求めるようになります。ですから、キリストの愛に満たされ、子供たちの必要なものを知り、その必要を福音をもって満たそうと常に願っている教師は、彼らの心の中に学びたいという願いを起こさせるのです。そして、子供たちに満足感をもたせ、また、一つのことを完成した、という誇りを与えるようにして、決して失敗したとか、嫌になったというような気持をもたせないようにするのです。学習がなされるためには、心備えと体験の原則と共に、この結果の原則を認め、正しく用いていかねばなりません。

子供たちの学課に対する興味を失わせ、消極的な態度をもたせたために、教えることができず、自からも敗北するようなことがないように心がけましょう。

四、日曜学校小学部下級科に應用できる教授法

ここでわたくしたちは、あなたのクラスに適當だと思ふ方法を提案したいと思ひます。もちろん、場所と時、また環境によつて教授法、教える過程、順序などはそれぞれ違つてくるものですから、あなたのクラスに一番合うものを、あなた自身がきめていかなければなりません。

ある方法は、ある年令のクラスにはよい結果をもたらししても、他のクラスにはそのようにいかないかもしれません。

わたくしたちは、小学部下級科の子供たちは、すでに自分たちが知り、体験したところのものと関係づけて理解する、ということを学びました。ですから、わたくしたちは教える過程においても、彼らのもっている知識や、理解できることに結びつけて、新しい真理を示すようにしなければなりません。おとながもっている知識や、子供たちがもっていたらよいと思われる理解力を基礎として教えるはいけません。ですから、子供たちに、本当にはっきりと示すことのできる方法を選ばなければなりません。そこで、次の方法が小学部下級の生徒に適應できるのではないかと思ひられます。

- (a) 物語の方法
- (b) 活動の方法
- (c) 復習の方法

(a) 視覚教材の利用

(a) 物語の方法は小学部下級科の子供たちの聖書の勉強には最適の方法と思われれます。それは、子供たちは物語が好きですし、物語はいつの時代にも常に効果的な働きをしてきたからです。

主イエスもまた物語をよく用いられたかたでした。主は、偉大な真理を明らかにするために、放蕩息子、よきサマリヤ人、十人の処女、種まく者、富める農夫など、子供でもわかるような話、しかし、また、学者でも考えさせられる深い物語をいくつもされました。

教師は皆、真理を子供たちに示すために、物語の方法を用いるようにすべきです。そして、子供たちが自分自身で真理を適応することができるように、わかりやすく話してあげる技術を完全に自分のものとするべきです。

(b) 活動の方法は、その分野、可能性、適応の範囲が非常に広範囲にわたっています。しかし、目的は簡単で、子供たちが何かを自分たちで行うことによって学ぶようにさせるといふことです。学課の中心となっている主題に関係した行為を行わせることによって、子供たちは、実際に自分自身が、その学課に出してきた人物のように考え、自分たちがその物語を行なっているかのように考えて行動するようになるのです。これが、行うことによって学ぶということの目標なのです。

実際に利用できる活動というものは、数限りなくあります。どの学課にはどのような動作をさせるとい

うことは、その学課の内容によってきめるべきです。また、子供たちの必要としているものや環境その他の要素も加味してきめなければなりません。たとえば、小学部下級科の中でも、三年生の子供は一年生よりも神の造られた世界の美しさを表わす野外の風景を上手に絵にかくことができます。しかし、一年生は砂箱の中に、木、動物、人間などの人形を配置して、自然の美しさを表わすことができます。ある子供には、神が造ってくださったものはこのようなものです、と口で説明するよりも、その一例を実際に示すことの方が効果的ですが、またある時には、それと全く逆の場合もあるのです。

以上述べた、砂箱や、絵をかくこと、会話などのほかに、外部の人のために何かを計画したり、劇や無声劇、物語の復習、歌を歌うこと、またそれらのものを二つ、三つ組み合わせて行なうことなどが考えられるでしょう。この実際的方法については、のちほどまた詳しく語ることにいたします。

(c) 復習方法はその名前の通り、前に学んだことを思い出させて、新しい学課のいとぐちにすることで、す。ですから、復習方法は、古い、すでに知っていることと、これから学ぶ新しいことを結びつける鎖のような働きをするもので、多くの教師がしばしば用いるのです。

復習ということは、いろいろな方法で始めることができます。それにはまず、ごく碎けた調子で子供たちと話を始めるのも一つの方法です。また、質問をして、それに答えてもらうという方法もあります。なぜなら遊びのような方法で質問を出すこともできます。また、黙って、前に使った掛絵などを見せて、その

物語を言わせる方法もあります。どのような方法を用いても、思い出させようとするその目的を達成するために、あなた自身、思想、順序というものを整理して準備することを忘れてはなりません。

(a) 視覚教材の利用

これは小学部下級の子供たちには非常に有益なもので、一度この方法を用いた教師は、さらに、目を通して教えることの重要性を認識するようになるのです。今日では、耳で聞くだけよりも、目を通すことによって、より多くのことが理解されるということが認められてきています。そして視覚教材は単に補助教材ではなく、実際に教えるものであると考えられています。

視覚教材とは、正しい意味で、目を通して生徒に学ばせる効果をもつものすべてを意味するのです。視覚教材はより早く、より効果的に学習をするように助けるものです。視覚教材は物語や人物を生き生きとさせます。そして物語の背景を形づくり、感情をそのまま訴え、実際に心に訴えるところの真理を説明してくれるのです。

小学部下級のクラスで用いることのできる視覚教材の中には、フランネルグラフ、黒板、のぞき箱、紙に貼ったり額に入れた絵、種々の実物、モットーやポスターなどの印刷物、その他の展示物、実際の景色などがあげられると思います。これらのことについて、さらに後ほど詳しく語ることにいたします。

五、方法の選択を決定する要素

ここで、どのようにしたら最もよい教授法を選ぶことができるでしょうか、という質問が当然出てくると思います。

繰り返し述べていますが、教える環境というものは、その時その時によってみな違うものです。しかし、教授法の選択の際に、普通一般的に適応できる要素がいくつかあるのです。このような法則を知っているなら、教材や器具、そして生徒たちと彼らの必要としているものを知ることにより、あなたは最も効果的な教授法を自分で選んでいくことができます。

(a) 目的

教授法の選択を決定づけるものは、まずあなたが最終的に目標としていることからです。あなたは子供たちに敬虔さと礼拝の態度を植えつけたいと考えているのでしょうか。その場合、物語の方法も、歌を歌ったり、あるいは祈ったりする活動の方法も、ゲッセマネの園において祈るキリストの聖画などの視覚教材を利用する方法も用いることができます。また、前の週の学課から何かを思い出させたいと思ふときには、教師が指導して子供たちが答えるという会話や討論方式を用い、復習の方法であなたの目的を十分に達成することもできます。

(b) 生徒の成長程度

生徒の成長過程は、みなそれぞれ違っているものです。ですから、彼らを教える方法もそれぞれ異ならなければなりません。小学部下級科の中でも、年長の子供たちに使って成功した方法でも、年下のクラスには適当でないかもしれません。また、同じグループの中においても、ある子供には適当でないかもしれません。

大抵の子供は、物語の方法には喜んで反応を示します。しかし、ある子供は進んでいて積極的に応答をしたり、物語についての話し合いをしたり、物語を自分の言葉で言ったり、あるいは、登場人物に扮して劇をすることもできるのです。ですから、注意深い教師は、いろいろの形の活動の方法を選んで準備する必要があります。

(c) 学習に対する生徒の態度

教師は生徒各自の相違がそのまま学習に対する態度に表われることを知っています。上手な教師は一人一人の子供に学びたいという気持を起こさせますが、彼らの必要としているものは、一人一人みな違うのですから、それに応じて学習指導をしなければなりません。

もちろん、あなたのクラスにも、エネルギーのあまっている元気な子供がいるでしょう。そのような子供には、特別にエネルギーを消耗するような活動を与えてあげなければならないのです。

しかし一方には、恥ずかしがりやで、あまりエネルギーでない子供もいます。そのような子供には、もっと静かな方法で勉強を楽しませるように、知恵を用いなければいけません。そのような子供には、物語をすることだけで十分でしょう。もちろん、彼らにも、ある程度の活動は与えなければなりません。このように、あなたはいろいろのことに注意しながら、計画をたてていかなければならないのです。

(d) 前に学んだ勉強

いつも日曜学校や教会に出席して物語の背景などをよく知っている子供と、そのような知識を全然もっていない子供とは、やはり違った取り扱いをしなければなりません。よく知っている子供には、長々とした緒言のような話は unnecessary ですが、知らない子供には、かなり長い時間をかけて、背景を示してあげなければなりません。よく知っている子供たちには、その知識をさらに深め、確立するために、物語に加えて活動を多く与えるようにしたらいのです。あまり知識をもっていない生徒たちには、根本的な教えをより多く必要とするのですから、物語の方法が最も効果的でしょう。

(e) 教材の性質

学課の内容が、また、それを教える方法を決定いたします。ある種の学課は、ある種の方法に合致しますが、他の方法に合わないということがあります。ですから、あなたの教える学課によって方法も左右さ

れるのです。

たとえば、球根と鉢植えの花を用いて、死と復活の生命を表わす話はイースターには適當だと思われま
す。しかし、クリスマスには全然向きません。カロールを歌ったり、贈物を贈ったり、贈られたりするよう
な活動がクリスマスの物語を示すには適當なのです。

(f) 器具と設備

しばしば、この物質的な環境によって、決定的な制限が加えられてしまいます。それはたとえば、教室
が狭くて子供たちはすし詰である、教材の数がたりない、というようなことです。しかし、研究心の強い
教師は、利用できる設備がたとえ、どのようなものでもそれを最高度を利用していくのです。最善の授業
をするために、彼は最高の学習条件をつくるように最大の努力をしていくのです。また、小学部下級科の
教師は、どのような環境においても、常に変化に富んだ教えをしなければなりません。それは物語の方法
を使ったり何かの活動をさせたり、変った種類の視覚教材を見せたりして、子供たちを驚かせ、楽しませる
ような新しい方法を常に考えていくべきだということです。

(g) 授業の時間

たいてい、授業の時間は予定がぎっしりつまっているものです。ですから、短時間の中に最もよい効果

をあげるような方法を選ばなければなりません。このような環境においては物語の方法はいつも非常に有
効な方法です。しかし、教師は、学課は完全に植えつけられるように、物語に加えてその学課を見たり、
聞いたり、行なったりする機会を計画し、また与えるように心がけるべきです。

(h) 教師の能力

これこそ学課の成功、不成功を決定する重要な要素です。よい教師は、自分の用いる方法をよく分析し
て、準備をし、強調すべき点を正しくつかんで、はっきりと教え、多くの効果をあげることができるので
す。能力の少ない教師もこれと同じようにすればよいのです。どちらの教師も同じように、さらに向上発
達を心がけなければなりません。両者ともさらに研究し、さらにより教授法を身につけることによって、
その教える能力を増大することができます。また、偉大な真理を示すために種々異なった方法を考え
出していくことができます。しかし、両者とも自分の目的としているものを達成するためには、どの方法
が最もよいかということを、自分自身の知識に従って、考え、決定していかなければならないのです。

第五章 実際の教授法

よい教師は教える際には、まず子供たちの体験を利用します。そして、教えたことが子供なりのさまざまな問題の解決に役立つように仕向けていきます。人生の経験が先にあることによって学習が行なわれ、小さなことが理解されて、はじめて大きな物事に対する理解力が生まれてくるのです。ですから子供たちの理解力を通すことよってのみ、彼ら一人一人の実際的な必要を満たすことができるようになるのです。このようにして、さらに大きな目標を彼らの中に達成していくことこそ、教師に与えられた務めだと思われれます。

その目標とは創造主であり、すべてのよきものとの与え主である神や、救主であり友であるイエスと正しい関係をもつことと、神の言を学び、神の愛を実際に働かせることによって、クリスチャン品性をつくりあげるといふことです。

教師は小学部下級科の生徒の体験をよく理解しなければなりません。次に挙げるのは、子供たちの体験の中でも典型的なものです。これ以外にも、実際に教える鍵となる種々の体験をあなた自身見出して、このリストにつけ加えることができますと思います。

(a) 家庭での経験、家事の手伝、動物の世話、両親の保護、弟、妹の取り扱い、親戚のたれかの誕生や死や結婚、病気、クリスマスの楽しみ

(b) 家庭外での経験、他の子供たちとの友情、自分のことの始末、他人を助けること、日曜学校に行くこと、学校に行くこと、規則を守ること

子供の体験は教授法を決定するものです。二十世紀の小学部下級生の体験は、過去の時代のものとは細部にわたって調べると、大分、異なったものでしょう。ですから、方法の一定化や「一度よかったものは、いつもよい」という考え方は通用しないことを考えなければなりません。しかし、学習の原則は、常に変ることなく、人間性というものも常に同じですから、どの時代のどの人にも聖書の真理は適応することができるとは、そこで、この不変の真理を、現代の少年少女に教え、植えつけていくための方法を、いくつか考えてみなければなりません。

一、物語の方法

すでに多くのことがこの方法について言われていますが、その中のいくつかを考えてみましょう。

(a) 物語をするにあたって、まず第一に要求されることは、その物語とそれに関係のある一切のことに、十分な知識をもち、よく知っていることです。物語を本当に理解するためには、何回も読む必要があります。最初はその物語の感じを大づかみにするだけでよいのですが、二回、三回と読むにしたがい

細かいところまで知るように心がけるべきです。こうして自分で物語を注意深く、目標をもって読み、物語を十分に知った時に、今度はその物語を他の人々に自由な気持ちで喜んで語る事ができるのです。

(b) 物語を興味深い方法で始めること

物語を興味深く始めるには意味深い言葉を使ったり、歌を歌ったり、視覚教材や簡単な質問などを利用するなど、いくつかの方法があります。しかし、方法はいくつあっても、目的とすることは、子供たちの注意力をひきつけることなのです。

イエスは例話の中で、しばしば、注目すべき深い意味のある言葉を使いました。たとえば、「天国は、良い種を自分の畑にまいておいた人のようなものである。」マタイ一三・二四

もし学課が他の人と仲よくしていくという内容のものならば、その話を聞く心構えをつくるために、「きょうもだれかを助けましょう」という意味の歌を歌うのもよいでしょう。そして歌のあとで「もしあなたの弟や妹や友だちが、けがをしそうになったらどうしますか。助けてあげますか」というような質問をしたらよいと思います。それに対して、子供たちは自分で体験したことを思い出して答えるかもしれません。しかし、とにかくそのようにして、物語のいとぐちをひき出すことができるのです。そして、きょうの学課は、一人の人がもう一人の人を助けてあげた話、すなわち口トが不親切であったのにもかかわらず、アブラハムが口トを助けてあげた話である、と案にきり出すことができるのです。

さらに、興味をひくような視覚教材を利用しなければなりません。たとえば、よき羊飼とその愛について話をするといえます。その時に、いろいろな質問や意見をひき出すような絵を見せたらよいのです。それは子供たちが絵を見て話している間に、あなたは物語をはじめていくいとぐちをつかむことができます。からです。この場合には、有名な良き羊飼の絵を、紙の台紙に貼ったり、額に入れたりして示したらよいと思います。そして、碎けた調子で話し合いをし、羊飼いの愛や羊が完全に信頼していること、その平和な情景などを一つ一つ指摘してあげるのです。そうすれば「ずっと昔、まだイエス様がいらったところ、イエス様が住んでおられた、遠い遠いパレスチナの地に、みんなで行ってみることにしましょう」というように話をはじめることが容易になってきます。これであなたの物語は非常によい語り出しができたということになるでしょう。

(c) 物語の中心的事件を、正しい順序で話すこと

これをするためには、物語の骨子を順序正しく頭の中に入れておかなければなりません。それには、準備の研究をしている間に一つのアウト・ラインを書いたらよいのです。もちろん子供たちの前に立って話をする時には、もう、それはいりません。他の人と争うのを好まず、常に平和を願ったイサクの柔和さを話す場合、創世記二十六章の物語の順序を次のように考えることができるでしょう。

一、かんばつの危険な状態

二、イサクが神に従って祝されたこと

- 三、いくつかの闘争とイサクの柔和さ
- 四、神の助けの再保証
- 五、イサクの神礼拝
- 六、敵に対するイサクの勝利

これらの主要項目の下に、さらに細かい項目をつけ加えることができますが、この順序で話をするならば、混乱がなくなり、間違った点を強調するようなこともなくなることでしよう。

(d) 不必要な引照をしないこと

不必要に思われる細かいことまで全部話をする、かえってその物語を理解しにくくさせてしまいます。そして、どのように面白い話もつまらないものになり下がってしまうのです。

(e) 物語を自然な、実際の話のようにすること

これをするためには、次のような方法があります。

- 一、活動にみちた話にすること
- 二、描写豊かな言葉を用いること
- 三、できるだけ会話を使うこと
- 四、子供たちの理解できる言葉を使うこと

(f) 教訓めいたことをやめること

もし道徳的な教訓のようなものを加えるなら、それは、いわゆる説教くさいものになり、子供たちは興味を失い、話も嫌いになってしまいます。もし物語が十分に話されたならば、いちいち道徳的教訓をつけ加える必要はないでしょう。道徳というものは物語自体が、はっきりと示してくれるに違いないのです。

(g) 興味の最高潮に達した時に、物語を終えること

このようにすれば、もちろん満足感が伴います。その時の結論は、簡潔にした方がよいのです。たとえばノアが洪水の後で礼拝をしたことを話すといえます。その際には、神が虹を約束のしるしとされたことを話します。そして虹とその色について話し、これが神の愛のしるしだ、ということを説明し、その次に「神さまありがとう」という感謝の歌を歌って、静かに子供たちに頭をたれさせ、目を閉じさせ、虹を思い出させ、神の愛を考えさせる静かな礼拝の一時をもたせることができます。このように神の愛に感謝をし、敬虔な祈りをもって終えるというように、最大の興味と満足を得たところでやめることにより、あなたは完全に目的を達することができるのです。

二、復習方法

物語の方法の中にもこの復習方法は組み入れられてきます。それはこれらの方法は互に関係をもってい

て、全然、独立して用いられるものではないからです。わたくしたちはこの復習の方法によって、古い知識がどのように新しい知識の基礎となり、新しい学課が前の体験によって、実際に適応されるようになるかということを調べてみたいと思います。

復習の方法として次のようなことが考えられます。

- (a) 話し合い
- (b) 問答形式
- (c) 物語の絵や視覚教材の利用
- (d) 思い出すような活動（なぞなぞ遊び）

(a) 話し合いは、子供たちに学課の目標というものを、はっきりと理解させるために、非常に重要なものです。一例を次にあげてみましょう。学課の題は「両親を敬う」で「神をよろこばせる」という単元の一つとなっています。話し合いは次のように始められます。

「まず、暗誦聖句を考えてみましょう。それは『あなたの父と母とを敬え』です。このおとうさんやおかあさんを敬うということは、一体どういうことなのでしょうか。」（子供たちにいろいろ答えを出させますが、あまり長くないうちに、本当の意味を指摘するようにします。）「それはあなたがたのおとうさんやおかあさんを愛して、言いつけを守ることです。そして、ていねいに礼儀を正しくして、

嘘をつかないで、いつも本当のことを言うことです。」「だれがおとうさんやおかあさんを敬いなさいとおっしゃるのでしょうか。」（子供たちはすぐ答えることができるでしょう。）「そうです。神さまです。神さまが両親を敬うように、とおっしゃるのです。おとうさんやおかあさんを愛したり、言いつけを守ったりせず、敬わない人に、神さまは罰をくださいますよ。」

「それでは、どうしたらおとうさんやおかあさんを敬うことができるでしょうか。」（ここで子供たちに言いつけを守る方法をいろいろ言わせてみます。それから教師もいろいろな方法を提案します）「そうしてあなたがたは、おとうさんやおかあさんを助けることができますね。そして親切な人になり、また丁寧な礼儀正しい人になれます。また嘘をつかないで本当のことを言えるようになります。そうすると、おとうさんやおかあさんをよろこばせることができます。ですからあなたがたは、おとうさんやおかあさんを敬うことになりますね。」

このような話し合い、従うことに関するコーラスや歌を歌うならば、さらに効果をあげることが出来ます。コーラスのあとで簡単な聖書の話を「聖書の中から、きょうはおかあさんの言う事をよく守った人のお話をしましょう。それはイエスさまがあなたがたと同じような小さな子供だった時のことです。イエスさまはどういう風にしておかあさんを敬って幸福にしてあげたのでしょうか。」などと始めていったらよいでしょう。

(b) 問答形式

前述の話し合いの形式を見ると、すでに、問答形式が含まれていることに気がつきます。ですから、ここでは繰り返す必要はないでしょう。

(c) 視覚教材

物語や話し合いのいとぐちをつくるのに、聖画など有益なことは、すでに話しました。聖画のほかに視覚教材として、フランネル・グラフや黒板、展示物や印刷物、実際に生きたものなど利用することができます。

(d) などなど遊びなどは時々やってよいと思います。これは前に学んだことを思い出させるために大変効果的です。たいていの子供は、などなどが好きですから、すぐに反応を示します。ここに聖書の物語に出てくるアブラハムの忠実な僕についてのなどなどの例をあげてみましょう。

この人はこの前の日曜日のお話に出てきました。

この人は神様を愛していました。

この人は御主人の言いつけを守りました。

神様はその人にするのを教えてくださいました。

この人はだれでしょう。

このような方法で、種々の聖書の物語の事件や場所、あるいは人や物についてのなどなどをつくることのできると思います。いろいろな変った形の質問をすることができます。注意深くよい教師たちは、自分で考えて、このような方法を考えつくり出していくものです。

三、活動方法

これは名前の通りに、学課の中心思想を最も効果的に植えつけるために、論理的方法を用いることです。子供たちは、たいてい物語を聞くだけでなく、行うことによって、よく学びとるのです。ですから、子供たちの手、頭、声など全身を使って覚えさせるようにするのがよいのです。その方法には次のようなものが含まれるでしょう。

(a) 工作

(b) 物語の復唱

(c) 歌

(d) 暗誦

(e) 計画(グループ)

(f) 無言劇

(5) 実物展示

(a) 工作

このことばは広い意味をもっていて、手を使ってするもの、絵をかくこと、砂箱で箱庭をつくること、ポスターをつくったり、人物を紙で切り抜いたり、展示物をつくったりすることが、みな含まれるのです。子供たちは物語の中心的な情景や人物を絵にかくのが好きです。彼らが絵をかけたときには、いつでも、自分でかいた絵を説明するようにさせて下さい。そのことによって、絵に表現したことが、本人にも他の子供たちにも意味のあるものになってきます。

砂箱の中に、物語の情景の箱庭をつくることも簡単で、効果的方法です。砂箱の中に野原の背景をつくり、箱庭に使う人形をそこにおくことによって、教師が言葉で一つ一つの説明をするより、はるかにすばらしい情景が示されるのではないでしようか。

(b) 物語の復唱は、子供たちの協力があるとき、大変面白いものになります。子供たちに順に物語を話させ、だれかに主人公の役をさせることもできます。物語の中に子供たちが復唱をして話すと一番びったりするようなものもあります。そして、説明が多くて行動の少ない物語より、簡単でも活発な物語の方がよいのです。とにかく、子供たちに物語を思い出させ、また物語の意味を子供にしっかりと植えつけるために、自分たちの言葉で、もう一度物語を言わせてみることは、大変効果的なことだと思えます。

(c) 子供たちは歌を歌うのが好きです。子供たちが心の底から歌っているのを見ると、歌を歌わせることとがどのように大切なことであるか、考えさせられます。歌はただ単に、思想を伝える方法ではなく、礼拝をさせるものです。たとえばイースターです。その時にはイースターの意味をこめた嬉しい歌を歌うようにするのがよいです。そして、「神様がわたくしたちのために下さったことについて歌うことは、神様をとても喜ばせることです。神様が下さった多くのすばらしいことの中でも、一番すばらしいと思われる、イエスさまをお墓の中から生きかえらせて、聖霊を注いで下さったことに対して、わたくしたちは心から賛美しましょう。キリストは甦りました。そして、キリストは生きています、と歌いましょう。」という説明を加えたらよいと思います。もちろん、この時に、指導する教師自身、その歌をよく知っていて、子供たちに喜んで歌えるように指導してもらいたいと思います。

(d) 暗誦ということはいつまでも結果の残る、非常に価値のある活動です。今日まで、どれだけ多くの人々が御言葉の心にしまい、その結果、誘惑にうち勝つ霊的な力を得てきたことでしょうか。しかし、その反面、これが正しく行われないので、目標を達成せず、無意味なものになっていることが多いことにも気がつくのです。その場合、子供たちには何の益にもなりませんから、彼らはずいぶん暗誦するの

嫌いにさえなってしまう。それは悲しいことです。ですから、暗誦も学課に自然に伴った、もう一つの楽しい経験となるように仕向けていきましょう。

それにはまず、暗誦すべき聖句をはっきりと示してあげることが必要です。そして、同じような言葉、間違いやすいような言葉を説明し区別してあげることが必要です。それから一つ一つの言葉の説明も必要でしょう。適当な時期に、何回か繰り返して言わせることも意味をよくのみこませることになります。たとえば、神の家、すなわち教会の中で敬虔さについて、子供たちに教えるといえます。この学課の暗誦はマタイによる福音書二十一章十三節です。そこで、あなたは、神様の家ではどのようにしたら神様を喜ばせることができるか、を説明するのです。(その説明には黒板書きをして、教会の絵をかき、教会に行こうとしている男の子と女の子の絵を簡単に一筆書きの方法でかいて示したり、あるいは同じような情景を示している絵を何かの本から見つけてきて、それを示してもよいと思います。どちらにしても、その絵の言おうとしていることを指摘して、あなたの目標にそった話合いをすることができましょう。)そして子供たちに、教会の中で神を喜ばせるためには、静かにすること、礼儀正しくすること、歌を歌うこと、祈りをする、などいろいろな提案するようにさせて下さい。神の家におけるわたくしたちの行動に對して、神の要求は何か、ということが「わたしたちの家は祈の家となえられるべきである」という言葉をはき出すとぐちになるのです。このような順序をふんで、あなたの子供たちに、暗誦聖句を楽に言わせることができるようになります。物語の中でも、この聖句は何回も繰り返して言わせ、その意味を

深く植えつけて、目的を達成することができるのです。

(e) グループ計画も大変実際的な効果をあげるものです。グループ計画とは、学課を実際の行動に表わすことです。学課の真理に大変現実的な意味を持たせるのに役立ちます。学課が「困っている人を助ける」という題のものだとしましょう。その目標に困っている人を助けるのを神が求めていらっしゃることを示すことで、暗誦聖句はエペソ人への手紙四章三十二節です。そこで、わたくしたちは「お金がないので、いろいろなものを買えないで困っている人々に、わたくしたちは何かしてあげることができないでしょうか。おとうさんやおかあさんがいないために、孤児院などに入っている子供たちを助けるための献金をするのはどうでしょうか。どうすれば、わたくしたちのお金で、食物や洋服や家に必要なものなどが買えるでしょうか」という風に話をして、子供たちにいろいろの提案や質問をさせ、次の日曜日にとそのための献金をもつてくるような計画をたてさせるのです。これは実際的な興味深い一つの方法だと思います。

(f) 子供たちは無言劇が好きです。ある学課には種々の活動が含まれていますので、そのままでもよい劇になります。無言劇では子供たちはただ言葉を使わず、手足の動作だけで物語を演じるのです。たとえば、クリスマスの物語です。驚いた羊飼、礼拝をしている羊飼、馬小屋の中(ただの想像でそのつもり)で嬉しそうに坐っているマリヤ、静かにそれを見守っているヨセフ、などを子供たちは上手にやってのけ

るでしょう。注意することは、できるだけ動作は簡単にさせるといふことです。

(8) 実物展示は、また独特の目的を達成することができるといふことです。これは学課の真理を示すために実物を使う方法です。この方法を用いる場合、ある子供は何でも文字通りに解釈することを考え、象徴的なものと実際的なものを混同しないように注意することが必要です。しかし、簡単な実物を用いる方法は、それ独特の味をもっているのです。たとえばイースターの日曜日美しい鉢植の百合の花を展示したとします。また百合の球根を準備します。この二つのものをいとぐちとして用いて、イースターの話のように進めることができるでしょう。

「さあ、みなさん、このきれいな花を見て下さい。それはきれいな花びらを開いて、甘いかおりをただよわせています。わたくしたちは、こういう花を見ると何だか嬉しくなってきましたね。

けれども、こんなにきれいな花も初めからこんなにきれいな百合ではなかったのです。これはある時には、ただの丸いこのような玉だったのですよ。(球根を見せます。)

ところがある時、だれかがこの茶色の玉を植木鉢に植えました。そして上から土をかけました。玉は暗い土の中に入れられてしまったのです。それは長いこと眠っていました。けれども、その間に太陽がこれを暖めてくれました。

だれかが水をかけてくれました。そして暖い太陽の照るところに出してくれました。こうしていくうち

に、何が起きたかわかりますね。水が土の中にしみていくと、この小さな玉がそれを吸いました。それから、太陽がこれを暖めました。茶色の玉はだんだんふくらんできました。そしてとうとう、その茶色の洋服は破れてしまいました。

そうしているうちに、こんどは小さな羽のような緑色の芽が出てきました。それが勢いよく土をどけて上へ上へと伸びました。そのうちに茎がだんだん伸びて、小さな蕾ができました。その蕾がだんだんと大きくなって、ついにこのようなきれいな花が咲いてきたのです。

もし、あの球根が土の中に入れられなかったら、それはいつまでも球根で、花は全然咲かなかったでしょう。この球根が何も文句を言わないで土の中に入れられたのがよかったですね。」(話をしながら、球根のあちらこちらを見せたり、花のいろいろな部分を指し示して、実物教育を行い、最後に結論として霊的な意味をもたせる必要があります。)

「イエスさまは、ちようどこの茶色の球根のようでした。イエスさまは御自分を投げ出して十字架の上で死んで、お墓の中からも一度甦って下さいました。イエスさまは今もこのきれいな百合と同じように生きていらっしゃるのですよ。」

四、視覚教材の利用

わたくしたちが利用できる視覚教材には、次のようなものがあります。

- (a) 台紙に貼った絵、または額に入れられた絵・物語のいとぐちを開いたり、話合いのために使うことができます。
- (b) フランネル・グラフ・物語の説明のために使います。
- (c) のぞき箱・物語の中心になっている情景を強く印象づけるために使います。
- (d) 黒板・説明のためのスケッチや黒板書きを書いたり、モットーや報告を書くために使います。
- (e) 展示物・物語をさらに生き生きとさせ、興味をひくために自然界にあるものなど、種々のものを使うことができます。
- (f) 印刷物・ポスターやモットー、カードなど学課を補うもの。
- (g) 実際に生きているもの・真理を示すためにクラス外の教師や他の人人に来てもらったり、動物や植物などいろいろのものを利用できます。

五、イエスの教授法

日曜学校の教師はイエスがどのように教えられたかを研究して、よりよい教師となるように努力すべきです。イエスこそ歴史を通じて、世界的な力と感化力をもっている偉大な教師です。そして、今日でも、彼はあらゆる意味において神の示された理想であり、教師の教師なのです。

イエスの用いられた教授法は今日のわたくしたちにとっても模範的なものです。イエスは人間の思いを

完全に理解しておられましたので、彼の用いられた方法は、今日でも応用することができます。そこでイエスの教授法を学んでみましょう。

(a) イエスは模範を示して教えられました。イエスは御自分の生活を通して、多くのことを教えられました。彼を知っている人たちは、みな、彼が完全な人格をもっていたことを認めました。人々はまた、イエスが実に偉大な人格的力をもっていることを感じたのです。そして、イエスが情深いことを知り、また彼の人生の基礎であった愛を十分に示してくれるのを見たのです。彼は教えようとする真理を自らの生活によって示して下さったのです。

(b) イエスは権威をもって語られました。イエスの話は簡単でしたが、要領を得ていました。彼は聖書を非常によく知っておられましたし、またその意味をよくつかんでおられました。彼は常に十分に語りましたが、余分なことは言いませんでした。イエスはまた限らない忍耐をもって、急ぐことなく教えられました。しかし、時間を無駄にすることなく、常に聞くものに対しては話をする備えを整えておられました。イエスは真理を心に直接、非常に強く打ちこまれました。マタイによる福音書五章を見ますと、この点がよく示されているようですが、わたくしたちは福音書を通じて、さらにこの点を深く調べて見るべきではないでしょうか。

(c) イエスは、はっきりとした肯定的な言葉を用いられました。

イエスは常に何々をすべきだとおっしゃって、何々はするべきではないという風には申されませんでした。山上の垂訓の中でもイエスは人々に「モーセの律法は何々するな、と言ったが、わたしはあなた方に何々しなさい」とおっしゃっているのです。イエスは人々に、何をすべきか、何をすべきか、何が正しいかということをおっしゃるのです。そして繰り返して、繰り返して疑うことのできないような権威をもって、簡単な肯定的な教えを語り、人生の指導方針をはっきりと示して下さったのです。

(d) イエスは教える時には、明白な目標をもっておられました。イエスは人々に神がどのようなかたであるかを理解させるという目的をもって常に語られたようでした。彼はまた人々をあらゆる苦しみから助け出すとされ、高い目標をもった、実際のな人生哲学を彼らに示そうとされました。また、イエスは彼らを罪から救い出そうとしましたし、神に対し人々に対して正しい関係をもつようにさせようとも努力されました。聖霊を受けたいと願う人には、これを満たそうとし、偉大な最後の命令を行おうとするものは、そのために必要なものすべてを与えようとしたのです。

(e) イエスは聴衆と彼らの理解力の相違に応じて教えられました。イエスは人々の必要としているものを見出して直ちに悔い改めさせ、その人生を変えようとするように

して現実的な助けを与えていかれました。これをなすにあたって、イエスは「神の国」という言葉の意味を日常の生活のいろいろな例を用いて、はっきりさせて下さいました。そして常に、簡単なことから始めて、よりむずかしいものへと教えを進めていき、肉体の必要、頭脳の必要、心あるいは魂の必要に応じて真理を説明していかれたのです。

彼は飢えている人には生命の水であり
渴いている人には生命の水となり

羊を飼っている人々には、神の小羊であり、また、よき羊飼であり
果樹園を経営している人にはぶどうの木となり

農夫に対しては、種をまく者の例話を用いられたのです。

いつでも、どこでも、イエスは平易なものの中に神の真理を見出して、聞く人々の必要としているものと理解力に応じて、真理を示していかれたのです。

(f) イエスは人々に意見を出させる教授法の価値を弁えておられました。

彼は聴衆に話をさせて、彼らの言うことに十分に耳を傾けられました。彼らがまじめな質問をしたり、意見を出した時に、イエスは決して、叱りとばすようなことはしませんでした。イエスは彼らを楽な気持ちにさせ、しかも、真理を打ち込むときには打ち込むようにされたのです。

④ イエスは人々の生活に、祈りこそ無くてはならない要素であると主張しました。イエスは御自分で祈られました。祈りの重要性については繰り返し強調されたのです。そして、完全な祈りの型として主の祈りを示して下さいました。

このように見てきますと、イエスは完全な教授法の模範を示して下さいたように思えます。イエスの用いられた方法は簡単ですが、はっきりとしており、形式ばらずに目的を達成し、実際的な効果をあげているようです。要約してみるなら、イエスの用いられた方法は、目的としたことを生徒の實際生活の生きた結果として生み出すために、大変よい方法であるということです。彼の御言葉を教えるわたくしたちに、彼は「わたしに学びなさい」とおっしゃっているのです。

第六章 授業の準備

授業の準備を良くすることは、より良い授業をするための一つの方法であります。それは、その授業の思想や目的を教師にも生徒にも共に理解できるような、そして、実際的な方法で組織立てていく青写真とも言えるべきものです。それは家を建てる際の設計図と同じように、良い授業をするためには、なくてはならない、学課を指導していく指針だということができるとしよう。

一、授業の準備の必要性

何事でも価値のあることを行おうとする際には、十分な計画をたてる必要があります。日曜学校で幼な子たちに教える、という重要な働きには、最大の注意を払い、十分な準備をしてとりかからなければならぬのです。

よく、教師はほとんど、授業の準備をしないで、あわただしく教室にやってきます。そして授業の時間が始まっているのに、話をしながら何とかそれをまとめようとして、前に行ったり、あとに行ったりして、はっきりとした目的もなく、さまよっているような話し方をしたりするので、そのような教え方を

する場合には、話の中に一致性がなく、また学課の目的としたことも達成できず、不必要な話し合いや話が多くなってしまふのです。これは子供たちを神から、そして神の御国から失っていく第一歩であり、許すことのできないものだと思います。教師と名のつく人々は、このような損失をすることのないように責任を持たなければなりません。

自分に与えられている責任を意識している教師は、十分に学び、準備をする重要性を認めているのです。そのような教師は、自分の能力に頼ったり、その瞬間の靈感に頼るようなことはいたしません。なぜなら、最高の能力も靈感も自分自身の十分な努力と準備との上に初めて与えられるものであることを知っているからです。良い教師は、子供たちを教え、教会の中に保ち続けるといふ重要な奉仕をするためには、それだけの準備を、犠牲を払ってもしなければならぬということをよく知り、またそれを行なっていくようにするものです。

二、授業準備の有益性

授業の準備をするということが、どのような有益点を持っているかを考えてみると、次のようなことがあげられると思います。

(a) 授業の準備をすれば、授業の目的を達成することができます。そして授業に意味を加えることになり
ます。

(b) 準備することにより、学課の中で行われる種々の活動を互に関係づけることができます。そうすることによって、その学課全体が意味あるものとなってまいります。そして、十分な学習がなされること
になります。

(c) 準備することによって、より良い過程、順序、教材、活動などを選ぶことができます。そして、より効果的な授業ができるようになります。

(d) 準備することによって、貧弱な教授法を排除して、より良い方法を利用していくことができます。
ようになります。

(e) 準備することにより、教師は自信を得て、さらに熟練した教師に、急速に成長していく能力が与
えられるようになります。

(f) 準備することによって、教師は、生徒の間の個人差というものに応じて、彼らに接触することが
できるようになります。

(g) 準備することによって、必要な時に必要な教材や器具などを利用できるようにしておくことが
できます。

(h) 準備することによって、強力な結論を持ち、その学課の真理を強く訴え、印象づけることができ
ます。

- (i) 授業の準備をすることにより、実際の授業の結果を調べ、その価値を判断することができます。
- (j) 授業の準備をすることによって、生徒たちの信頼を得ることが出来ます。子供たちは、教師が準備をして来ているかどうかを察知することができます。そして、しばしば、そのことによって、教師に対する認識も変わってくるのです。

三、正しい授業の準備

熱心な教師は、何回教えた学課でも、教える前には必ず準備するものです。そして良心的な教師は、常に向上し、成長する余地を見出すことができるのです。そこで、わたくしたちは、正しい授業の準備方法をここに示しておきましょう。このことによって、教師の方々が、よりよき授業の準備をするようにしていただきたいと思えます。

まぢがった準備の方法については、多くのことが言われています。しかし、わたくしたちの目標としていることは、どのようにしたら、小学部下級科の生徒に、学課をはっきり教えることができるか、そのための準備は、どのようにしたら良いかという点を強調することにあるのです。ですから、準備をするにあたっての根本的な問題をここにあげることになります。正しい授業の準備とは、学課を生徒の必要や興味、あるいは、体験、理解力などにあてはめていくことです。それはまた、学課を子供たちの生活にあて

はめて、彼らが実際に真理を生活の中で実行していけるようにさせるのです。それは、ただ単に、話をするだけではなく、さまざまな方法を用いて、そのメッセージをはっきりとしたものとして、植えつけていくことなのです。説教式に大声で真理を宣言しなくても、真理をしっかりと彼らに植えつけさえすれば、真理の伝達と言えるのです。教師は子供たちを教えるのであって、彼らを遊ばせるではありません。

学課を生徒の必要や興味、体験、理解力などに適応させるならば、彼らの注意力をひき、また、その行動に感化を与えることができるようになるのです。それはあなたの働きの計画をたてるにあたって、最も安全な、そして価値ある方法です。良い準備とは、それらのものを全部互に調和させ、関係づけることなのです。そして、子供たちができる活動をするようにさせ、彼らの子供らしい必要を満たし、また彼らの体験を通して、学課を示すのです。そうすることによって、彼らの興味をひき、目的を達成することができますようになるのです。

四、良い準備の性質

良い授業の準備の具体的な点を次にあげてみることにいたします。

- (a) 良い準備は、漠然と頭の中で考えるだけではなく、紙の上に書いてみるべきです。書いてみることによって、それは、はっきりしますし、正確なものが出てきます。計画を書いてみることによって、教師

は、より統一のとれた完全な学課を教えることができるようになります。また、書いてあれば、将来それを向上させるために参照してみることもできるでしょう。しかし、注意しなければならないことは、その書いた計画が、授業の際に松葉杖となり、それにばかり頼るようになることです。準備した計画は、完全にマスターして、教える時には自由に教えられるようにしなければなりません。

(b) 授業の準備は明白で、実際的なものでなければなりません。それに用いる言葉は意味のある、簡単な言葉で、しかも、有益な助けとなる、内容に富んだものでなければなりません。

(c) 良い授業の準備は、変更が必要な場合に、ただちにそれに適応できるように柔軟性を持っていないければなりません。必要ならば最初にたてた計画を全部放棄しても、突発事態に即応して、学課の目標としているものが成就されるようにすることが考えられるのです。

授業の最中に何か予期しないことが生じ、それに対応するにあたって、重要な真理を教え示すばらしい機会が与えられたとします。その際に、教師は自分のたてた計画を一時放棄しても、その場の必要を満たすようにしなければなりません。たとえば小さな小学科の生徒が、赤ちゃんの弟や妹などが生まれたいことを話し出したとします。もちろん、これはイエスの愛について語ろうとしているあなたの計画に邪魔をするものです。しかし、そこに与えられた機会を考えていただきたいのです。多分、あなたは

そこで、その子供の話を親切に聞いてあげることによって、その子供が実際に、新しい愛を見出しれことに気がつくようになるでしょう。そこで、イエス様がその子供も小さな赤ちゃんも共に愛して下さるということを示すことができます。そして、イエスが特に子供たちを愛して、祝福を与えて下さったという聖書の記録を示すことができます。そうすれば、クラスの生徒全員が、イエスが自分や自分の兄弟たちを愛して下さる、ということに改めて目を見張るようになるでしょう。このような事態が生じても、自分があらかじめ計画した計画から離れて柔軟性ある授業内容を持つていくようにするならば、最初の計画にあった目標を十分に完成することができるのです、少なくとも、あなたはその小さな子に、神の愛をはっきりと示すことができるでしょう。このことにより、あなたは自分のたてた授業の準備計画に忠実に従うのではなく、あなたの生徒に忠実に奉仕したことになるのです。

(d) 良い授業の準備は、生徒一人一人の相違を考慮に入れるものです。そして、それぞれに適当な、実際的なものを与えなければなりません。消極的な子供、恥ずかしがりやの子供、熱心な子供、良く知識の発達した子供と、そうでない子供、いつも嬉しそうな、幸いな環境にいる子供、そうでない子供、それぞれに適当なものを与えるようにする必要があります。

賢い教師は、小学科生徒一般の性質をよく知っているものです。そして、自分のクラスの生徒の個人的相違も知って、それに従って授業の計画をたてるのです。そこで、生徒全部にあてはまるような教材を用

い、また活動を含むような計画がたてられます。ですから、当然、その時時に、瞬間的に思いついてするということはありません。

五、授業の準備の型

授業の準備をするにあたっては、二種類準備が考えられます。それは、第一に、霊的な準備であり、第二は、実際の準備です。これらは、互に他の一方がなくては不十分なもので、両方とも準備することに よって、はじめて完全な準備ができるのです。

(a) 霊的な準備。準備というものは神の祝福があつてはじめて完成されるのです。神の祝福がなければ、どんなに人間的に準備しても効果的ではありません。日曜学校の教師は自分の働きは神の働きであるということに絶えず意識していなければならぬのです。そして、自分は聖霊の働くときの器にすぎない、その管となつていふと考えるべきです。そして、常に、神の尊さを求め、神の答えを望みつつ、祈らなければなりません。また、教師は日日、神の御心のうちを謙遜に歩み、常に愛をもつて、真実こめ、力に満ちて、学課を教えることができるようになっていなければならぬのです。

クリスチャンの教師たちは、献身に加えて十分な準備をして、はじめて聖霊が働き、真理を子供たちに はっきりと教えて下さるのだということを確信しなければなりません。

(b) 実際の準備。準備は早くから始めなければなりません。授業を教えた直後にできるだけ早く始めるべきです。よく一夜づけの準備がされますが、それでは必要な教材を集めたり、その学課中に含まれている思想を十分に考えたり、適当な計画をたてたりするようなことはできないのです。

シリーズになつていふ学課の全体を良く知らなければなりません。あなたは、これをはっきりと知ることによつて、各学課がどのようにそのシリーズ全体に関係をもっているかということを知つて、計画をたてることができるようになります。たとえば、このシリーズは三年を一期間として計画されたもので、今学期には、イエスを学ぶのであるというようなことを、はっきりと理解しているならば、学課の前後関係を良く考えながら、計画をたてて教えていくことができます。

学課の全体的な計画を理解するためには、あらかじめ次の学期の梗概だけでも調べておくべきです。そして、実際にその学期になつてからは、各学課の細かい研究や準備をするようにしたら良いのです。そのためには、少なくとも一週間前、熟考し、計画をするべきでしょう。このような過程をふんで準備するならば、あなたは、急いで一夜づけをした時にくらべて、はるかに豊かな自信をもつて、日曜日にクラスに臨むことができるはずで、もう一度、繰り返し申しますけれども、準備は早くから始めるべきです。

教案に出てくる型句は、全部調べてみることで、しかも一度ではなく、何度も繰り返し読んでそれらの型句を読んで下さい。その句一句だけでなく、文脈も全部読んで下さい。それから、引照つきの聖書を見

て、その意味をはっきりさせるような他の聖句にまで、目を通していただきたいのです。

学課の目標を理解すること。多分、教案の中には、目標がはっきりと示されていると思います。そこで、あなたの読んだ聖句と、学課の目標としていられるものを、はっきり関係づけ、その学課の目標としていられるもの自身も目標とすることができるよう、学課を、はっきりと理解して下さい。自分自身ではっきりした目標をもっていないならば、他の人を導いていくことはできないのです。

小学校の生徒に学課を良く理解させるために、教案に記されている、さまざまな提案を良く読んで下さい。たとえば、教案の中に提案されている生徒の活動などを利用して計画をたてても、もし、自分のクラスには他の方法が適当であると考えるなら、それを代りに使って計画をたてるようにすべきです。どのような計画をたてる時でも、常に学課の目標としているものを考えながら、計画しなければなりません。クラスの子供一人一人を考え、彼らの必要を満たすようにしなければなりません。学課が、特定の生徒だけではなく、すべての生徒に益となるようにして下さい。

子供たちが体験したことを通して、学課を語り始めるようにします。そうすることによって、子供たちは実際活動において、ただちに役割を果たすことができるようになるのです。たとえば、前の週の復習などは、大変よい話のいとぐちとなります。展示物の上に飾った絵や、置物などは、これから学ぶものに対しての予備知識を与え、あるいは、それに関係のある空気を作り出すのに効果的です。小鳥の絵や、花の咲きはこっている絵などは、ただちに、わたくしたちに対する神の愛のお取り扱いやご配慮などについて

語られたイエスの教えを、考えさせる空気をつくるのではないでしょうか。

十分な生徒の活動計画をたてること。生徒の活動といえば、話し合い、工作、無言劇、物語の復唱、計画、歌、簡単な劇など多くあります。しかし、どの活動でも、活動のための活動であってはなりません。それはあなたの目的としているものをはっきりと教えるための一方法なのです。

強力な結論を計画すること。最後に打ち込まれた強い印象は、子供たちに受けとられ、その後、あるいは一生の間、保たれていくかもしれないのです。しかし、この事実を、しばしば忘れられて、見逃がされてしまい、折角、学課の内容は豊かであるのに、結論がうまく出されないうちに、不十分な結果に終わってしまうのです。時間を十分にとって、急ぐことなく、結論をはっきりと打ち出すことが必要でしょう。

教材を整理して、効果的に使えるように計画しなさい。まず聖書をあなたの主材とすべきです。参考書（教案を含みます）は、第二の資料とすべきです。それから、関係のある物語、詩、音楽、絵、工作、器具、視覚教材などを考えるべきです。そして、学課に必要なもののリストをまず書いて、それらを整理しておき、いつでも必要なときに引き出して用いることができるように手筈を整えておくことが必要です。

学課の梗概を簡単に書いておくこと。そのことによって、あなた自身の計画を適当にたてることができますようになります。ごく簡単ですが、次のようなものを計画をたてる際に書いておくべきだと思います。

① 序言

- ② 学 課、あるいは聖書の物語
- ③ 結 論
- ④ 生徒の活動

このような計画をたてたなら、もう一度、復習し、必要なら、計画の変更も考えなければなりません。必要なものが全部、計画の中に含まれているかどうかを確かめて下さい。批判的に十分に検討し、さらに向上発展させる余地があるならば、その点を是正するようにして下さい。

六、模範的な学課の計画

ある小学科教案の「はじめに」という題の単元の中にあつた学課の計画を取り上げ、次に記してみましよう。

学課の題―神の世界創造

学課の聖句―創世記一章一節―二五節

暗誦聖句―創世記一章一節

学課の目標―神が天と地とその中にあるすべての生物を造られたことを示すこと

教材―聖書。教案。フランネル・グラフの背景とそれに使う人物。動物の絵（たとえば、鳥、家畜、野獣など）。鳥、花、木、その他風景の絵。咲いている花、器に入れた金魚、かごに入れたカナリヤなどの

生きもの。砂箱と玩具の動物、木の枝、造花、草など。画用紙とクレヨン、粘土。

アウトライン

a、序 言

1、視覚教育

(a) 動物、花、その他、生命のあるものの絵を見せること。

2、話し合い

(a) 主題は小動物、子供たちが見たことのある動物、行ったことのある場所など。

3、暗 記

(a) 暗誦聖句を説明して教えること。

4、適切なコーラス

(a) 神が庭を作られたとか、あるいは、太陽を作られたとか、「神様、ありがとう」という意味の歌

b、学課の本体（聖書物語）

1、視覚教育

(a) フランネル・グラフとそれに使う人物。

2、物語

- (a) 世界は最初どのような状態であったか。
 - (b) 最初の五日間にどのようなようにして創造の働きがなされたか。
- 3、生徒たちの協力

c、学課の結論

- 1、学課の中にある中心思想を繰り返し強調すること。暗誦聖句の復習。それから歌を歌い、祈りをする。

d、生徒の活動

- 1、砂箱を作る。
- 2、神の創造物の絵を何かかく。
- 3、神の創造されたものを粘土で形作る。
- 4、聖書の物語をもう一度話す。

七、アウトラインを土台とした、学課の詳細な内容

a、序言

1、視覚教育

小動物や家畜、野獣、鳥、花、木、風景などのよい絵や実際の花、動物(たとえば金魚やカナリヤなど)の全部でもよいし、その中のいくつかでもよいが、目立つように、また興味を引くように展示すること。

これは、神の創造ということに子供たちを導くために、話し合いを始める際に、ぜひ必要なものなのです。

2、話し合い

展示されたものを見ながら、子供たちが自分たちの持っている動物や、川、池、山、公園、動物園など、自分たちの行ったことのある場所について、発言をさせるようにします。そして、それらのさまざまのものが、どんな形をしていたか、どのくらいの大きさであったかなど、興味深かった点などについて、いろいろ聞いて、彼らに話をさせるのです。

そのあとで、子供たちに、わたしたちは、きょうは最初の動物や鳥や魚、きれいな芝生や木や花、池、川などが、どのようにしてできたのかをお話いたしましたでしょうと、はっきり伝えるようにします。そして、このすばらしいものを作ったのはどなたか、知っている人はいますか、と聞いてみましょう。

そうすると、すぐにだれかが、神様が作ったのですと答えるに違いありません。それが、さらに学課の本体に子供たちを導いて行く鍵となります。しかし、本体の物語に入って行く前に、子供たちに暗誦聖句を言わせ、適当な歌を歌わせるようにした方がよいと思います。

b、学課の本体

1、あらかじめ、フランネル・グラフを三脚の上に立てて準備をしておいて下さい。それから、物語をしながら、そこに貼りつける三つの情景を準備しておいてほしいのです。

(a) 「はじめに」、(b) 空と海が分離された情景、(c) 陸地と海が分離された情景

2、(子供たちに話して下さい。)(どこもかしこも水ばかりで、そして、暗くて冷たい場所を考えてごらん下さい。)(さらに目を閉じさせて、話を続けてごらん下さい。)

神様が最初に世界を作られたときには、世界はそのようなところだったのです。あなたがたが知っているどこよりも、それは濡れていて、冷めたかったですよ。そして、その時には生きているものはどこにもいませんでした。魚も百合の花も一つもなかったのです。

さて、神様は何もかも明るくて、きれいな天から、この世界がどんな状態をごらんになりました。そして多分、この世界をきれいな、すてきな場所にして、人々が楽しく住めるようにしてみよう、そうすれば、人々はきつと、神様に感謝して、神様を喜ばせるようになるだろう、とお考えになったのでしょうか。とにかく、神様はこの世界を美しい所にするようにしました。まず神様は「光あれ」とおっしゃいました。すると、光が出てきました。神様は光を見て大変よろこんで、「光を昼と名づけ、やみを夜と名づけ」られました。その時から昼間と夜、明るい時と暗い時がこの世界にあるようになったのです。(ここで、子供たちに目をあげさせます。)

けれども、どこにもここにもある水は、どうしたら良いでしょうか。神様はその水をどうもなさらなかったのでしょうか。そうではありません。神様は今度は水を分けたのです。神様は空と地球の間に大きな場所を作られました。そして「天の下の水は一つ所に集り、かわいた地が現れよ」とおっしゃいました。そうすると、水は海と 言われる一つの場所に集りました。そして、乾いた土が見えてきたのです。

乾いた茶色の何も生えていない地面ができました。けれども、それはなんと暗かったことでしょうか。ちようど、チョコレート塊みたいだったでしょうね。神様はそこで、また考えたのです。そして、次に何を作られたのでしょうか？ 神様は植物、木や草などを作られたのです。神様がそれらのものを作られたときに世界はどんなにきれいになったことでしょうか。芝生は暗い土の上に敷かれたじゅうたんのようでした。葉の繁った背の高い木は、その枝を手のように揺り動かしていました。赤、ピンク、青、白、黄色など、いろいろな色をしたきれいな花があたり一面に咲いて、その甘い香りがいっぱいに漂っていました。それから、甘い、良いにおいの木の実が藪の中にも木にも、ぶどうのようなつるにも、たくさんになりました。神様が作られた世界は、こんなにすばらしい所でしたので、神様はそれを見て大変喜ばれました。

次に神様はほかにもっと何か作らなければならぬと思われたのでしょうか。神様は昼間のために特別な光を作り、夜のためには、また別の光を作りましたとおっしゃいました。そして、昼間のために太陽を作り、夜のために月を作りました。それから太陽と月が春、夏、秋、冬をはっきりと示すようにとおっしゃいました。それから、神様は夜、空にキラキラ輝く星を作りました。それはちようど、空からこの

地球をのぞいて見ているお友だちの目のように、パチパチとまばたきました。けれども、この美しい世界は何と静かな動かない場所だったことでしょう。太陽も月も星も音を一つもたてませんでした。草も木も花も動きまわりませんでした。ですから、この世界は、何か寂しい場所のよりに感じられたのです。そこで、遊んだり、駆けたり、ジャンプしたり、木や花の間を走り回ったりするものがほしかったのです。木の上を飛び回って歌を歌うようなものも欲しいし、きれいな水の中を泳ぎまわって、水をはねたりするものが欲しかったのです。新しい世界には生きたものが欲しかったのです。

神様は世界を生きているもので満たしたいと思われました。それで、「水は生き物の群で満ち、鳥は地の上、天のおおぞらを飛べ」とおっしゃいました。そして、大きな鳥や魚やその他の生物を作られて水の中に入れました。それから、鳥をたくさん作って空を飛ぶようにさせました。こうして、神様は彼らを祝して下さいました。

ところが地の上はどうでしょうか。神様はそれを忘れませんでした。そして、牛や羊をきれいな草の生えている牧場においたり、獣や動物たちを森やジャングルの中に、ちゃんとおいて下さいました。神様は牛や羊や野獣など、いろいろな動物を作られたのです。（子供たちに動物の名前をいくつか言わせて下さい。）

もう世界は静かな、そして、寂しい所ではなくなりました。世界には生きたものがいっぱいいました。鳥は歌を歌っていましたし、動物たちはあちらでもこちらでも、モーツといたりメーと鳴いたりして

ました。海の動物たちは、あちらこちら泳ぎ回っては水をはねかえしていました。（ここで子供たちに、今までに作られた動物の何かの鳴きまねをさせたり、ものまねをさせたりしたら、良いと思います。）
神様はそれらをごらんになって、これは良いとおっしゃいました。

c、学課の結論

神様はこうして天と地を作られました。そして、木や草や花、水の中の動物、地面の上の動物、鳥など生きているものを全部作られました。神様は太陽、月、星なども作られました。神様だけがこういうことをすることができたのです。そして神様がそれをして下さったのです。（ここで暗誦聖句を一緒に言わせます。）

わたくしたちは、こういうきれいなものをみんな作って下さった神様、大きなものも、小さなものも、天も地も作って下さった神様に、ありがとうございますと心から感謝をいたしましょう。（ここで、祈りをして、ありがとうございますという感謝の歌を続けて歌うようにいたします。）

d、生徒の活動

1、活動の選択

砂箱の情景—玩具の動物や木の枝、小さな花、人造の草などを砂箱といっしょに準備します。そして、

「供たちに、それらのものを使って、神が作られた最初の世界の姿を砂箱の中に作るようにさせます。凶凶―子供それぞれに紙とクレヨンを渡します。そして、神が作られたものを何でも良いから書くようにさせます。その際、子供たちにそれぞれ好きなものを大きく、はっきりとわかるように書くようにさせて下さい。」

粘土細工―子供たちに、粘土をつかって、何か、神がこの世界に造って置いてくださったものを、自由につくらせてみましょう。

物語の復習―子供たちに、順番に今日の物語を言わせるようにします。子供たちはきくと、自分たちの言葉でそれぞれ物語を言いますから、話を少しかえるかもしれません。またきくと、いろいろな音を入れたり、動作を付けたりしながら話をするでしょう。

第七章 小学部のクラス

日曜学校も、小学部下級科も一つ一つのクラスによって形成されているものです。大きな日曜学校でも、小さい日曜学校でも、小学部という部の中にいくつかのクラスがあるような場合でも、各クラスが、より効果的な働きをするならば、日曜学校全体が良い、効果的な働きをするようになります。これは、積み木のようなもので、各クラス一つ一つが積み木で、これを積み上げることによって、日曜学校全体が完全なものになっていくのです。ですから、日曜学校の姿を見るよりも、各クラスの問題を一つ一つ見ていく方が、わたくしたちの働きをより良く理解するためによいと思います。その方が実際には楽なのです。また、良いクラスができれば、それだけ良い日曜学校ができることになるのです。

一、クラスの適当な組分け

最も重要な問題は、子供たちの年齢別ということですが、小学部下級科の年齢は六才から八才までで、下級科は三年間あることになりました。

小さな日曜学校などでは、小学部下級科と幼稚科（四才と五才）を、一緒に取り扱っている場合もあり

ます。しかし、できるだけ早く、この二つに分離して教えるべきです。なぜなら、両者の間には非常に大きな相違があり、別々に分けた方が、さらに良いグループができあがるからです。幼稚科の子供たちは、まだ学校に行っておりません。そして、家庭の中にかくまわれて、保護されているのです。ですから、それだけでも、大きな相違が生じてくるわけです。小さな日曜学校で、まずクラスを区分するとしたならば、幼稚科と小学生の下級部を分離することだろうと思います。

クラスを分けるにあたって、性の問題も考えられます。しかし、普通一般に、男の子と女の子を分ける必要はあまりありません。もし、大きな日曜学校でクラスを幾つかに分ける場合には、六才児のクラス、七才児のクラス、八才児のクラスというように、年齢でわけて、男子と女子は一緒にしておいた方が良いでしょう。大きな日曜学校で、さらにこまかくクラスを分けた場合には、男の子、女の子と同じ年齢のグループで分けることも考えられます。その場合、男の子のクラスには、特に男の教師が欲しいと思います。男の子はこの年齢で、すでに男の教師に引かれるものです。ですから、もし男の子たちに興味を持っている活発な男の教師がいるならば、このように配置することを考えてよいでしょう。

小学部下級科の生徒には、三年の間かなりの変化がみられるもので、八才児と七才児との間には相違があり、七才児と六才児の間にも相当な相違があります。ですから、六才児も八才児も同じクラスで教えている教師は、大変やりにくいはずで、六才の子供はまだ読むことにも、理解力にも欠けています。ところが八才の子供は、かなり早く読むことができるので、下級生の遅い理解力に嫌気がさしてくるので

す。ですから、分級をする際には、まず年齢で分級するように考えなければなりません。小さな日曜学校で下級科のクラスが一つしか作れない場合には、教師が真中の七才の子供たちにわかるようにさせて、それより下の子供には少し背伸びをして理解してもらおうようにし、上級生には少しがまんしてもらおうようにすべきでしょう。しかし、子供にとっては、より低いところに自分からかんで行くよりも、より高いレベルに背伸びをする方がむしろかしくない、ということをお忘れなくして下さい。

幼稚科と下級科とを一緒にしなければならぬ場合には、多分、小学部下級科の教材や教案を使って、教えた方がよいでしょう。下級科の教案なら、教師はそれを幼稚科の子供に適当に変えて適合させることができるでしょうし、下級科の生徒も、そのためにあきらむようなこともありません。

次に、下級科のクラスの大きさはどのくらいにするべきかという問題ですが、いろいろな意見があります。しかし、最も決定的な要素となるものは、その日曜学校の建物の収容能力です。理想的な人数はクラス六人から八人で、絶対に十人以上にしないことです。よく下級科の教師が二十人、三十人のワイワイ騒ぎたてる元気な子供たちの中におかれてある姿を見ますが、そのような場合、教師は彼らをただ静かにさせるということだけで手いっぱいでしょう。クラスがあまり大きくなった時には、そのクラスを分けて、新しい教師をつけて分級をすべきです。こうして、分級することによって成長することが、最も自然な、しかも効果的な方法だと思います。小さなクラスならば、生徒一人一人に注意がゆきとどきますし、より効果的な靈的指導ができるのです。

二、クラスにおける教師の立場

教師はクラスの中心であり、成功の鍵です。彼はクラスの中の一つ一つの魂に対して、責任を持ち、彼らを主イエス・キリストに導き、救いの体験を各自が持つようにさせるという目標を持っていなければなりません。この最も重要な目標に加えて教師にはさらに、そのクラスの人数をふやし、クラスの活動を活発に行い、他の教師や日曜学校の校長、教師たちと協力していく仕事があるのです。

教師は、このクラスは自分のクラスだという考えを持ってはいけません。それは、神のクラスで、教師は神に対して責任を負わされているのであり、教会と日曜学校に対して、このクラスを祝された良いクラスにさせて行く責任があることを意識しなければなりません。大体、教師は一年の任期で、任命されるようにしたら良いと思います。もし、この契約が一年の終りに更新されないならば、教師はこのクラスをあげ渡すというくらいの気持でなければなりません。日曜学校の校長は、牧師や他の日曜学校の指導者、役員たちと共に、最も確実に、しかも効果的に働きを行なっていく教師たちを選び任命するように、心掛けなければなりません。その際に、個人的な感情を加えてはなりません。なぜなら、それは神の栄光のため、また、魂の救いのための働きだからです。教師は自分の働きの重要性を認識して、もし、なすべき働きをしていないと感じるなら、自分からその職を退くくらいの誠実さが、欲しいと思います。そのクラスを何年も受け持ってきたから、自分には当然このクラスの教師になる資格があるのだという考えは成立し

ないことを覚えていただきたいのです。

三、授業の前の活動

クラスの活動は、最初の生徒が来たときから始めるべきです。言い換えてみるなら、教師は子供たちが来る前に日曜学校に来ていなければなりません。そして、子供たちがクラスに来るときには、すでに準備を整えて、彼らを心から歓迎するようであればなりません。そして、授業前には、子供たちを迎え入れてくつろいだ気持ちにさせ、前の一週間に起こった事柄を話させたりして、子供たちとの友情を深め、家族的な雰囲気の中に彼らをおいて、楽に日曜学校の時間を過ごせるようにすべきです。下級科の中に、いくつかのクラスがある場合には、全教師がいつも早くから来ている必要はありません。半数の教師たちが今週の日曜日に早く来たなら、他の半数の教師は次の日曜日に早く来る、というように、いろいろ計画をたてることもできるでしょう。しかし、毎日曜何人かの教師たちが早く来て、子供たちの世話をすることは計画しなければなりません。もし、そうしないなら、子供たちは、日曜学校に早く来て何でも自由に行うことができるということになってしまいます。遊んだり、走り回ったり、オルガンをさわってみたい、教材をいたずらして、こわしてみたりして、しつけの問題が全然、取り扱われないことになってしまいます。そのような場合、子供たちの気持ちを静めることは容易ではなくなってきました。

九時の開校の前の時間は、靈的な意味で非常に大切な時です。この時間に教師は子供たちと形式ばらない集りをする事ができるのです。授業が始まると、形式ばった時間になります。この時間には個人的な、より直接的な取り引きができるのです。視覚教材や他の教材を使って、先週の学課を思い出させ、いろいろな意見を言わせたりすることもできます。下級科のクラスには、いくつかの展示場を作り、子供たちが日曜学校の絵を見たり、実物を見たり、自分たちで砂箱を作ったり、黒板書きを試みたり、おもちゃを使って遊んだりできるようにするべきです。しかし、このような活動は全部、教師たちの指導、監督のもとに行われなければなりません。もし、そうしないならば、それは何の意味もなく、ただ、遊びの時間となってしまうのです。

日曜学校は九時に始まるのではなく、最初の子供が来たときに始まるのです。

四、クラスにおける礼拝

下級科の子供も神を礼拝することができます。このことは、クラスの中で子供たちに礼拝指導をする計画の基礎となる重要な事実です。礼拝の時間は日曜学校全体あるいは、各部ごとに行われるだけでなく、各クラスでも行われなければなりません。クラスにおける礼拝は、自発的なものであり、単純なもので、あまり形式ばったものであってはならないのです。クラスの初めに礼拝の時を持つようにしたら良い

のですが、その際にも礼拝の空気に満ちた歌、子供の賑やかな早いテンポのコーラスではなく、古くからある礼拝用の讃美歌などを一つ、二つ用いたら良いと思います。もちろん、そのような讃美歌を歌う場合には、靈的な意味をよく説明してあげなければなりません。その説明も、簡単に、しかもはっきりとしてあげるべきです。そうすれば子供たちも古い讃美歌を良く理解し、好んで歌うようになります。またそれを歌いながら心から、神を礼拝する空気に溶けこんでいくようになります。その際に、もし教師が歌をリードして歌うことができるならば、ピアノやオルガンは必要ではありません。

学課の途中でも、神のみ霊が導くならば、自発的に、そしてごく自然に、礼拝の時を持つことができます。神が与えて下さったすばらしい祝福を数え、そのあとで、ちょっと静まり、子供たちに「目を閉じて神様のして下さったことを心から感謝しましょう」と言って、彼らを礼拝に導くことができます。感謝をするのは物語の中で言われた祝福に対してだけではなく、生徒自身が体験したことでもよいのです。自然界や日常生活の中に、あるいは教会や日曜学校で与えられる祝福の中に、神の慈しみを知ることのできる心を持った教師は、いつでも子供たちを恵みの座に導き、礼拝をさせることができます。人なのです。

下級科のクラスでは、学課を教える時だけでなく、他の場合にも聖書を多く用いるようにするべきです。聖書こそわたしたちの教科書である、神の清い御言葉なのです。このことを教師は言葉や態度によって、子供たちに、はっきりと植え付けるようにして下さい。授業の物語は聖書の中にある物語であることははっきりと子供たちに教え、話をする時にも、聖書を手に持って教える方が良いと思います。聖書が第

一のもので、教案は第二のものであるということ、はっきりとさせましょう。聖書は礼拝の時も用いるべきで、子供たちがこれを見たり、手にすることができるようにならなければなりません。小学部下級科の生徒は、自分で読めるのですから、自分の聖書を持って来るように勧めなければなりません。もし、聖書を持っていない子供がいるなら、何とかして手に入れるようにさせてあげ、全員が聖書をもって日曜学校に来るように指導すべきです。聖書を取り扱う際には、敬虔な態度をもち、注意深く、きれいな手で持つように指導して下さい。また、聖句を読み、その聖句を子供たちが暗誦して、どこにそれが記されているかすぐに見つけられるようにさせて下さい。さらに、聖書各巻の名前を教え、聖書の配列順序を教えて、どこにどの書物があるかをわからせ、見つけることができるようにもさせてあげたいと思います。

学課の物語は常に聖書からとられるのですから、教師はそのことを指摘すべきです。それは、物語を始めるときでも終えるときでも良いのですが、はっきりと言うべきです。また、聖書についての話をし、聖書に関する歌も歌うべきです。そして、神が聖書を与えて下さったことに対して、感謝し、讃美を捧げることも必要です。こうしてあらゆる方法で神の聖なる御言葉に対する感謝と信仰を、心の中に植えつけ、培っていくようにするべきでしょう。そのことにより、子供たちはやがて、来たるべき危険な時代に、信仰的な疑いや攻撃に対して防禦し、立ち向かうことができるようになるものです。

五、献金

ある人は小学部下級科において、献金の奨励をすることは、金もうけであると申します。しかし、もし、その人たちが実際に捧げる献金がどのくらいに少額であるかを知ったら、多分、そのようなことは言わなくなるでしょう。捧げることは、クリスチャンの特権で、すべてのクリスチャンが培っていかねばならない、霊的な徳である、と考えなければなりません。パウロはこれをコリント第二の手紙の第八章七節に「恵みのわざ」と呼んでいます。そして、わたくしたちがそれにも富むように、と願っているのです。献金は、単に教会や日曜学校に捧げるものではなく、主イエスに捧げるものである、ということをお教えないければなりません。たとえば、日曜学校で子供たちにわたす新聞にしても、子供たちに、それを自分たちのした献金でもらったのだ、というような考えを抱かせて帰してはいけません。小さな子供にとっても、捧げることは霊的なことで、神がわたくしたちに求めていらっしゃることであり、行わせるようにしなければならぬのです。実際問題として、全世界のものを所有しておられる偉大な神が、わたくしたちの持つていくごく僅かなものを捧げることを許して下さい、そのことによって、神の偉大な贖罪の御計画の一端にあずかるようにして下さい、と示し、驚くべき神の謙遜であると思えます。もし、わたくしたちがこのことを子供たちにはっきりと示し、クリスチャン・スチュワードシップの真の原則に従って、子供たちを訓練しないなら、明日の教会は、神のわたくしたちに対する御要求について無知となり、

神が教会を通して行おうとしておられる御計画を遂行できないものとなってしまふのであります。今、彼らが小学部下級科にいる間に、わたくしたちは、彼らの生涯を通じて、神の御計画が成就されるために、どうしても従わなければならない、重要な靈的な原則をしっかりと打ち込んでおかなければならないのです。

献金の集め方にも工夫をこらすようにするのも良いことです。時には、献金袋をいつものように回さずに、生徒が行進をして前に出て来て捧げるようにさせたり、いつもの袋とは違った他の入れ物に入れさせるようにすることも考えられます。子供たちの捧げる献金額は、どんなに少くとも決して過小評価してはなりません。献金は決して軽んじられるものではなく、あたかも、さして靈的要素のすくないもののように、それはしなければならぬけれども、またすぐに忘れてしまつてもよいというようなものでは、絶対にないということをわたくしたちは強調しなければなりません。かえって、それは授業中に行われることの中でも非常に重要な、そして幸いなものであることを強調したいのです。子供たちは、眞の捧げ物に関する靈的な意味を簡単に、そして、熱心に示すときに、ただちに反応を示してくれませぬ。一方、献金を持つてこない子供たちにたいして、注意深く取り扱わなければなりません。もし、献金のできない子供たちがいるなら、親しく励まし言葉をかけてあげることによって、その子供の気持をくつろがせることができるでしょう。また、時には、親からもらつた献金が、日曜学校に来るまでに子供たちによって着服されてしまつたり、何かの利己的な目的のために、捧げられなくなることがあることを教師は覚えなければな

りませぬ。これは、しばしば感知することができませぬし、親たちと話し合うことによつて発見することもできます。しかし、絶対に公けの前でそれをあばくようなことをしてはいけません。その献金が神の働きを助けるために捧げられるものであることを熱心に話して聞かせたり、そのようなことをした子供を個人的にじっくりと話し合うことによつて、問題の解決はできるのです。五円、十円のお金をごまかして使うような子供が、そのままに放つて置かれると、やがて将来、何万、何十万のお金を着服するおとなとなりかねないので。わたくしたちは彼らがまだ若いうちに抑制し、間違つた行いから正しい方向へと導いていかねばならないのです。

六、クラスにおける音楽

先に、子供たちの心を礼拝に導入するために、靈的な讚美歌の重要性について話しました。しかし、讚美歌以外の歌や、コーラスなども利用することができます。わたくしたちは歌を用いて学課をさらに説明し、休息や安心感を与え、あるいは靈的な教訓を教えることができます。クラスで歌を歌う場合には、たいして、隣のクラスが授業をしているのですから、あまり大きな声で歌わないように、注意しなければなりません。もちろん、その際にオルガンやピアノは必要ではありません。

楽器なしに歌うということは、かなり良く歌える指導者を必要とします。もし、教師がこういう面の才

能を持っていないなら、だれかこのように歌をリードできる人に助手として手伝ってもらうことも考えられます。もし、そのように助手がいて音楽を担当してくれるならば、これは理想的です。なぜかといえ、二人とも働くことができますし、一人が仕事をしている間に、他の一人は少し休んで、次にすることに対して、心構えをすることが出来るからです。子供たちには大きな声で歌わせる必要はありません。実際問題として、どちらかと言うと静かに歌う方が良いのです。隣のクラスとカーテンだけで仕切られているような場合には、なおさらそうです。大きな声で熱心に歌うのは、日曜学校全体か、科全体で歌うような時のことです。クラスでは静かに、思いをこめて歌うことが、かえって多くの良い結果を生むものです。歌の指導をする人は、時々意味のよくわからない言葉の説明をし、霊的な意味を強調して、子供たちが歌うこと自体によって、大いなる祝福を得ることが出来るように、指導してあげるべきです。

子供はだれでも歌うことが好きですし、音楽を聞くのも好きです。ですから、わたくしたちの科でも、大いにそれを利用して良いでしょう。そのことによって、授業そのものに、他の何物によっても得られない変化が与えられ、霊的な価値が加わることになるのです。

七、遊びと休息の重要性

子供たちは遊ぶように作られているようなものです。わたくしたちはこのことをはっきりと認めて、日

曜学校のクラスにおいてそれを利用したら良いと思います。これは特に小学部下級科の生徒には強く現われていることです。彼らが一つのことに興味を持つ時間はあまり長くありません。一つの物事に注意力を集中できるのも、ほんの短い時間で、多分、六分から十分位で、どんなに面白いことでも十五分以上、注意力を集中することはできません。ですから、下級科のクラスでは、さまざまの、変化に豊んだ内容の授業をするようにし、時々休息のために休憩時間をもつようにするべきです。教師は子供たちの感情をすぐに感知できなければいけません。そして、常に子供より一步先にいて授業に変化をつけるようにしなければなりません。もし、逆に子供たちが教師より先に進んでいるなら、教師が子供たちの興味を捕えることは、ほとんど不可能になってしまいます。子供たちの思考力を刺激し、興味をわかせるためには、ちょっと体の姿勢を変えさせたり立たせてみたり、遊戯をしながら歌を歌わせたり、ちょっとしたゲームをしたたり、椅子の回りを行進させたり、あるいは、提案や質問を試みたらよいと思います。活発ないたずらの子が、いたずらを始めない内に、教師は何かをしてあげなければならぬのです。大抵、問題をかもし出す子供たちは、非常に感受性の強い、どちらかというとかと先走りすぎて、教師の授業に興味を持つことができないのです。子供に手こずる教師は、いつも遅れていたたり、子供の関心を奪うようなものを持ち合わせていないからそうなるのだとも言えるでしょう。

しかし、これは一方的な話です。休息も、遊びも、もしその日の学課と結びついておらず、教師がその学課を通して子供たちに植えつけたいと願っている目的と関連していないなら、十分ではありません。遊び

も休息もその他のものも、みなその日の学課の目的とするものに互に関連性をもっていなければならぬのです。それにはもちろん、あらかじめ計画をたてる必要があります。また、わたくしたちは、ただクラスの秩序を保つことだけを考えれば良いものではなく、子供たちを忙しくさせておくために、工作をさせれば良いものではありません。クラスで行われるすべてのものが、その日の学課の一部分となり、その日の主題をうち立てて行くものでなければならぬのです。学課に関してのよい示唆などが教案にはよく出てくるのですが、イニシアティブをとるのは常に教師であることを覚えて下さい。教師はクラスの気分をよく感知して、必要ならすぐに新しい行動、それはあらかじめ、授業の一部分として考えていた計画でありませんが、それに移り、それらを通して子供たちの心にその日の学課の真理をはっきりと理解させるようにしなければならぬのです。

授業に変化をつけ、時々休息を与えるのに最も効果的な方法は、展示場を教室の中に持ってくることで、す。これは前述しましたが、展示場には授業の始まる前に、あらかじめ準備した実物などを置いて、授業中、折に触れてそれを示すようにするのが、木、花、植物、金魚、蝶、小動物などは良い展示物です。食物を置いておけば、神の人類に対する慈しみを良く示すことができます。イスラエル民族がカナンの地に入っていく時の物語には、とうもろこしを二、三本とぶどうを一房、置いておくこともよいと思います。このように利用できるものは無制限にあります。その日の学課に適當であるかどうかを常識を用いて十分に判断し、計画をねって欲しいものです。あるものはクラスの子供たちの興味を得るところか、か

えって興味を失わせてしまいますから、十分に考えて下さい。

疲れた子供たちを休ませるためには、ちょっとしたゲームや、指を使って面白い劇をして見せたりしたりよいでしょう。また、プログラムに変化をつけるのに音楽はいつでも利用できる良いものです。静かな音楽を聞かせて、しばらく休ませたり、また、動きたくて、むずむずしている時には、筋肉を活発に動かせるような、遊戯を伴った歌を歌わせることもできます。しかし、覚えていただきたいことは、小学部下級科の子供たちは聴覚より他の感覚の方が強いということです。ですから、わたくしたちは視覚、嗅覚、味覚、触覚というものを全部を利用して、彼らの心に真理を打ち込むようにすべきです。例話などは、実際に目で見る、あるいは手でさわったり、味わってみるようにならざるを得ません。多くの感覚を用いなければ用いるほど、わたくしたちは、福音の真理を彼らの心に深く打ち込むことになるのです。そこに、視覚教材、工作、図画、塗り絵、実物教育などの価値があるわけです。教師が体験を豊かに持ち、想像力を十分に活用するならば、ここで利用できるものの種類もほとんど無制限にあります。

八、教材

日曜学校で最も重要なものは、教師の次に教案であると言われています。これは小学部下級科のクラスにおいては真実です。

今日まで世界中の多くの日曜学校において、おとなから小さな子供にいたるまでの全クラスで同じ学課を教えることは、ほとんど不可能であるということが証明されてまいりました。幼稚科や小学部下級科のクラスで、青年科や成人科のクラスで学んでいるのと同じ学課が理解できるはずがありません。それはまた、非聖書的であるとも言えます。なぜなら、聖書の中に、「乳を飲んでゐる者は幼な子」であつて、「堅い食物は……成人のとるべきものである」と書いてあるからです。ヘブル人への手紙五章十三節、十四節。おとなに適當と思われる主題とテキストをとりあげて、小さな子供たちに理解できるように、やさしく教えるということは不可能なことです。全校で同じ教案を使う試みは、小さな子供たちを無視するという結果になるか、あるいは、子供の学課をおとなに教えるということ、おとなが困惑するという結果になるか、どちらかで常にうまくいかないのです。この欠点を除いて、最も良い働きを効果的にする方法は、それぞれの知性、理解力に適した学課を教えることです。そういう理由から、日曜学校の指導者たちは過去数年間、小さな子供たちのために、学年別の教案を考えてきました。学年別の教案というのは低学年用として、特別に準備された教案で主として聖書の物語で、小学部下級科の子供たちに興味深いものだけを取り入れているものです。この教案によって聖書の物語が正しく語られるならば、小さな子供たちにも聖書の知識が与えられ、霊的な真理や、実際のな人生の教訓などが、聖書の人物によって、現実的な教訓として、はっきり彼らの心に植え付けられるのです。

教案の中に示されている提案は、必ずしも全部行う必要はありません。実際問題として教案にはよく、

一回の授業には利用しきれないほどの提案が記されているのです。ですから、教師自身が、子供たちに実際に最も良くアピールするもの、最も効果的だと感じるものを、その中から選ぶべきです。教師は時に、その教案が提案するのは全く違った思想をそこから語ることもできます。教師は、教案が提案していることに縛られる必要はありません。自分自身が神から与えられた思想を用いてもよいのです。時には、教案の思想が他の思想を教師に思い出させるかもしれないのです。教師が常に覚えておくべきことは、教案は、単なる教師への助言者、助け手であり、刺激を与えるものであるということです。教師はそれぞれ神の御霊が導くに従つて、自分自身の学課を築きあげ、教案の中に示されているものの中から自分の計画と、その学課の目標に合致するものだけを完全に利用していくように心掛けるべきなのです。

教案を準備し、原稿を書く人々は、そのことによつて教師とその働きを限定しようなどとは考えておりません。たしかに、新任の教師は、教案に依存する度合が強いでしよう。しかし、経験が増し、教授法が磨かれることによつて、彼は子供たちの反応を考えながら、判断を下していくことができるようになります。また、理解と判別力とイニシアティブをもつて、何を用いていくかということを決断することができ、教案を読みあげるようなことは絶対にしないで下さい。教案に書いてある授業の順序や計画は、一つの提案にすぎないのです。利用できると思われただけを用いて、他の部分はあなた自身が考えてするようにして下さい。

逆に、教案の初めの方に出ている提案や思想だけを、飛び読みして、それを利用していくという間違った方法をとらないで下さい。教案の中には、有益なものが沢山含まれているのですから、最後まで読み通してもらいたいのです。また、提案されている歌もなるべく利用するようにして下さい。

九、記録

小学部下級科のクラスでは、どのような記録をとっておいたらよいのでしょうか？ 記録のためにはどのくらい時間をかけるべきでしょうか？ 記録とはどの程度重要なものでしょうか？ こういう質問に対しては、それぞれの日曜学校とそれぞれの部、あるいは科が答えを出さなければなりません。

しかし、自分たちの状態を知り、自分たちがはたして成長しているか、それとも縮んでいるのかということを知るためにも、その程度の記録はとっておかなければなりません。わたくしたちは委ねられている小さな子供たちは自分たちの責任であると考え、神のために彼らを安全に保つためにも、彼らの記録をとっておかなければならないのです。記録がある時に初めてこの働きが十分にできるのです。ですから最低限度の記録はどうしても必要なのです。

もちろん、わたくしたちは出席した生徒の記録はとっておきたいと思えます。そして、クラスでの献金の額も、記録にとっておきたいのです。しかし、これだけでやめてはいけません。わたくしたちは、だれ

が欠席をしたのかを知らなければなりません。そして、その欠席者の後続（フォローアップ）をして、彼らをもう一度連れ戻さなければなりません。さらに子供たちがクリスチャン品性を作りあげるためにも記録をとることが考えられます。たとえば、出席、遅刻の有無、前週の学課を覚えているかどうか、暗誦聖句を覚えているかどうか、献金を持って来たかということについて、採点をすることも考えられるのです。

当然、教師は自分のクラスの子供の記録はできるだけ正確に自分自身でも記録しておきたいと思うでしょう。ですから、生徒に関する重要な記録は全部、記録しておくべきです。誕生日を記録しておけば子供にとって、大切な日を覚えておくことができます。訪問をした記録や、その家庭の状況なども記しておけば、子供の背景を理解することができます。子供の好みや、才能、好き嫌いなども記しておけば子供たちを取り扱うのに大変有益でしょう。子供たちをよく理解すればするほど、わたくしたちは彼らの心に近づいていくことができるのです。これらのことは記憶にだけ頼らずに、はっきりと書き記しておいて、あなたの生徒の心の中に、主の御業が成就される機会を絶対に逃さないようにしていただきたい、と思います。

十、欠席者

教師は自分のクラスの子供たちが、指の間からぼろぼろと落ちるように、主から永遠に失われていく

ような事態を見逃がしてはいけません。よい羊飼は九十九匹の羊をおいて、たった一匹の失われた羊を追い求めて行きました。これこそ良心的な教師のすることです。欠席者に対しては、次の週にただちに何かの行動がとられなければなりません。葉書を出すだけでは十分ではありません。葉書は一割しか効力がないと言われています。一番良い方法は、欠席した子供たちを個人的に訪問することです。小学部下級科の子供たちは、教師が訪問してくれることを大変喜ぶはずで、そして、親たちもまた、自分の子供に日曜学校の教師が関心をもってくれることを嬉しく思うのです。そして、日曜学校と家庭との間に親しい関係がつけられる時に、常により結果が生み出されるようになります。あるいは親たちが教会に導かれることになるかも知れません。

十一、放課後

日曜学校の教師の責任が八時半、あるいは九時の日曜学校の開校時に始まるのでないのと同様に、その責任は九時半、あるいは十時の日曜学校が終った時間に無くなるわけではありません。忠実な、良い教師は、日曜学校が終った後でも、また日曜日が終って週日になっても絶えず責任を持ち続けるのです。そのような教師は、週日の子供たちの生活に触れたいと思います。そして欠席した子供たちの家庭訪問に加えて、他の子供たちと楽しい、親しい交りの時を持つように努力するのです。子供たちと親しくなり、子供

たちによって愛されるようにするよい方法として、クラスのピクニックをしたり、教師の家庭に子供たちを招いて、楽しい交りをもつことが考えられます。その際にも教師はある子供だけを愛して、魅力のない、貧相な子供たちをないがしろにしているというような誤解を受けないように注意しなければなりません。クラスの子供たちは、主が教師に責任をもたせて下さった小さな羊の群なのですから、この中の一人をも失ってはならないのです。日曜の朝に一時間教えるだけでなく、いつも、この働きをし続ける責任を感じ、またそのように努力する人になりましょう。

第八章 小学部下級科の組織

小学部下級科のクラスが一つ以上できたら、そこにはすでに「小学部下級科」という一つの独立した科が存在することになります。それは正式の科として認められていようといまいとに関わらず、事実なので、もちろん理想としては小学部下級科だけで独自の礼拝ができる下級科ホールが欲しいのです。子供たちに関校礼拝の中から多くのものを得てもらうためには、すべてのものを彼らの知性や理解力に合わせて語られ、提供しなければならぬことに気がつきます。おとなの礼拝から子供に何かを得てもらおうと願っても、それは、無理なことです。それは、ちょうど、おとなの日曜学校教案から、こどもに彼らが喜んで学課を学ぶことを望むのと同じように、無理なことです。ですから、日曜学校の設備がゆるされるならば、子供たちが自分たちの開校礼拝を各クラスの前にすることが出来る場所を作りたいのです。科だけでなく礼拝をするためには、もちろん、科の主任とまたその活動を補助する職員が必要です。ここで記憶すべきことは、科の大きさというものは、その科の働きの成功、不成功を決定する要因ではないということです。生徒が十五人しかいない科も、五十人あるいは百人いるような科も同じように効果的な働きをすることが出来るのです。小さな科に対して、大きな科と同じように、注意深く、祈り深い準備が常にされなければなりません。子供は皆、神の前に尊い存在であることを覚えて、クラスに子供が数人しかいない

からといって、努力を惜しむようなことをしないで下さい。そのようなことを神は喜ばれません。ある子供は将来のムーデーとなり、ある子供はフィニーとなるかもしれないのです。もし、主の再臨が遅ければ、彼らは神の働きをする重要な人々となるかもしれないのです。

なぜ小学部下級科を作らなければならないのでしょうか。それは教師のためというよりは子供たちのためなのです。子供たちは、彼らの能力や限度を考慮に入れて計画された環境の中で、最も良い成長発達をすることが出来ます。日曜学校においても、他の年令の子供やクラスから分離することによって、さらに多くのことをわたくしたちは彼らの中に完成することが出来ます。この年代の子供だけの独立した科があることは、それだけ彼らの必要を十分に満たすことができるということなのです。

一、科の組織

科にいる生徒の数が、当然その科の組織の程度や職員の人数などを決定いたします。それをあまり高度に組織化してしまっはいいけません。目的を達成できるような組織は、最低限度持たなければなりません。

小学部下級科というのは、日曜学校の一つの単位であり、また教会の中の一単位なのです。ですから、職員たちは、教会に対し、また主に対して、自分たちの科の働きを成功させる責任を負わされているのです。教会の牧師はまた、小学部下級科の牧師であり、そこで行われる働きに対して援助を与え、監督をし

なければならぬのです。

下級科の職員はみな重要な人たちです。教師は子供たちと直接働く人々ですから、非常に重要であることは言うまでもありません。しかし、科の主任や、彼を補佐する役員たちがいなければ、実際に科の働きを統行することは不可能でしょう。主任は車輪の回転軸のようなものですが、軸のまわりを回転する車輪がなければ、軸だけでは何にもなりません。科の中には常に職員同志が互に尊敬し愛し合う空気がなければなりません。このクリスチャンの愛と親切が、科の職員たちの間にないならば、子供たちにそれを教えることは実際上不可能なことです。わたくしたちは、コリント人への第一の手紙十三章に記されている態度を、互に日々の接触の中に保ち続けたいと思います。

二、職員

小学部下級科の成功、不成功は、その科の職員の質というものに大いに関係があります。職員の数は、最少限度にとどめておき、全員が働いて、仕事をしないでぶらぶらする人のないようにしなければなりません。役員や職員の選択は十分な注意と正しい判断をもってしなければなりません。職員はだれでも、皆、新生の体験をもち、実際に活発な信仰生活を営んでいる人で、日々神と交り、御言葉を学ぶクリスチャンでなければならぬのです。また、職員には、忍耐強く、親切で、しかもよく理解してくれる人を選ぶべきです。短気で、すぐに怒ってしまうような人を小学部下級科の職員にすることは、考えられないこ

とです。子供に対する真の愛も必要な条件です。それは、子供たちは人工的な上べだけの愛を、ただちに感じとってしまうからです。また、職員の中には、働きに対する愛と熱情と共に、信頼できる忠実な、そして、協力的な態度も見いだされなければなりません。この人はと思う候補者の中に、このような条件をもし見い出すことができない場合、わたくしたちは、さらに祈り深く、他の人を探し求めた方がよいと思います。小学部下級科の子供たちの生命は、非常に柔軟な感じやすいものですから、彼らを不注意な職員の手に乗ねることはできないのです。

普通、小学部下級科には、主任と副主任、書記、オルガニスト、それに子供六人に対して一人の割合で教師、というような職員が必要です。大きな日曜学校では、より効果的な働きをするために、さらに職員を殖やすことも考えられます。しかし、それはあくまで、その科の大きさによってきめるべきことです。

小学部下級科の教師に必要とされている条件を前にあげましたが、これは主任に対しても、また、他の役員に対しても、要求されることです。さらに主任の場合には、これに加えて指導力と実際に組織管理していく能力がなければなりません。科の主任こそ、目的に向かって進んで行くペースを、ほかの職員たちに対して示す人であると思います。もし、主任が十分な準備をしないで来たり、働きに対して不まじめであったり、不注意であったりするならば、他の教師も、役員も、みな彼にならっていくようになってしまふでしょう。科の主任はその科の働きを進行させて行く務めを持っているだけでなく、さらにその科の生徒の魂に対して、責任を感じなければならぬのです。その他の点については、日曜学校全体の校長、副校

尺、書記、會計、オルガニストなどに要求されるのと同じ条件が、科の職員らにも要求されているので

三、科の開校礼拝

礼拝とは、子供たちを一つ所に集めて、神に対する真の礼拝を実際に指導し、理解させていくための時間のことです。このことによつて、子供たちが神の前にぬかずき、神が人間に求めておられる礼拝と美を常に捧げることができるようになっていくべきです。

多くの日曜学校では、最近が開校礼拝は行われませんが、クラスの後の閉校礼拝は行われていないようです。この問題は、各日曜学校で定めるべきことでしょう。しかし、閉校礼拝を行っている日曜学校では、これには開校礼拝の中には含むことのできない、書記の報告や他の報告などができる利点のあることを指摘しています。

礼拝を各科ごとに別々にすることができない多くの日曜学校のことを考えてみましょう。ある場合には、日曜学校を二つに分けて、十一才以下の子供を一つに集めて、他の所で礼拝をすることも考えられます。しかし、部屋が一つしかない日曜学校では、皆が合同で礼拝をしなければなりません。その際の最善の方法は、礼拝の興味や標準のおき場所を毎週変えて、礼拝はいつもおとなの標準で行われるものではなく、小さい子供たちにも理解できるものも含まれているのだと、感じるようにさせていくことだと思います。

す。日曜日ごとに、各科が責任をもって、その科が中心になってその科の子供たちが実際に何かをするようにさせていくという方法も考えられます。また、集会のある部分を小さな子供たちを中心に行い、そして他の部分を年長の人々のためにも、ということもできるでしょう。方法はどちらにしても、とにかく、小さな子供たちが一年中を通じて、毎日曜日、同じようにおとなを標準とした礼拝に強制的に参加させられる、ということがないようにしなければなりません。

(a) 集会の計画

礼拝は、あまり注意深く計画をたてて、その計画を最大もろさずきちんと実行していくために、型にはめられた、不自然なものになってはいけません。また、その反面、あらかじめ神の前に待ち望んで準備をしないならば、その結果、だらしない、真の礼拝とは縁遠い集会になってしまうことも考えなければなりません。主任も、他の職員も共に注意深く、また、折り深く毎週の礼拝集会の計画をたてなければなりません。そして、集会中に、神の御霊が、もし特別に導かれるならば、あらかじめ計画した計画もさっておいて、それに従い、また突発的なことが起こった場合にもそれを利用して、集会の指導をいかなければならないのです。しかし、歌おうと思う歌をきめたり、集会の主題をきめたり、集会の順序、話す物語、その他、瞬間的に考えることのできないようなことがらを、あらかじめ準備しておくことは、神を喜ばせることであり、よりすばらしい集会を結果的に生み出すに違いありません。ですから、わたくした

ちは注意深く計画をたて、さらに予期しないような事態が生じ、機会が到来することもあることを考え、心構えをして進んでいくべきだと思います。

礼拝集会は、常に変化に富んだものになければなりません。毎日曜、同じスケジュールで繰り返して繰り返す、習慣的に集会をしていくようなことがないようにしたいものです。そして、いつもと違った集会の仕方、変わった活動、新しい職員の使用、なにかびっくりさせ、楽しませるような計画、子供たちのプログラムへの参加、というようなことを考えて、変化を与えたらよいと思います。

前に、わたくしたちは、礼拝集会を一つの主題のもとにまとめる必要について語りました。その主題は、大抵の場合、その日の学課と関係があるはずでです。ですから、礼拝で歌う歌もまた、行われる種々の生徒活動も、みなその主題にそって計画されなければなりません。もちろん、その場合、教師たちが、分級の時間に各クラスで教えようとしているものを、先に、礼拝の時間に話してしまうようなことをしてはいけません。礼拝の時間には、その日の学課に直接触れるものではなく、それと関係のある平行的な思想を示すようにした方がよいと思います。主任は、その学課の背景であるとか、教師が使わないと思われる教材を用いて、礼拝を指導して下さい。

(b) 暗誦聖句

暗誦するということは、小学部下級科の子供たちに最も適当な活動の一つです。各クラスでも暗誦はか

なり多く行われると思いますが、これは、礼拝においても大変興味ある部分になると思います。新しい歌やコーラスを教える場合にも、暗記はしなければなりません。大抵、メロディーを何回かひいたあとで、子供たちに歌詞を言わせてみ、それから歌わせるようにするものです。これは、子供たちが言葉を正しくつかみ、また、歌の意味を理解するようにさせるためなのです。そのほかイースターやクリスマスなど、特別な場合に、生徒はそれぞれ暗記をして発表するようにもします。しかし、科全体ですることができるのは、聖句暗誦だと思います。

この科の集会で聖句暗誦をする場合、いくつかのことを注意しなければなりません。何回も同じことを、意味を理解させずに繰り返して言わせる、昔流の方法は賢くありません。良い方法は、その聖句を全部子供たちに示し、その部分部分子供たちの理解できるようにすることです。一言づつ区切って教えずに、一つの思想ごとにとめて教えるようにした方がよいのです。言葉で区切って教えると、思想が通じない場合ができてきますが、思想ごとにまとめて示していくならば、それは、子供たちの頭の中に、はっきりとまとめられていくようになります。その聖句の背景にならなければならないことや、それが記された方法などについて話をすれば、それはさらにはっきりと、記憶されていくようになるでしょう。暗記をさせる場合、その指導をする主任や職員は、子供たちの示した能力に対して、常に感謝し、また、激励する態度を忘れてはなりません。そして、注意深く、暗誦すべき聖句を選び、子供たちの中にいつまでも結果が残るように計画し、指導し

なければならぬのです。

四、科の職員会（教師会）

大抵の日曜学校では、学校全体で、毎月職員会が開かれているようですが、これは当然、そうあるべきことです。しかし、各部あるいは科でも、そのグループ独自の問題を話し合うための会合を開く必要があります。ある日曜学校では学校全体の職員会と科の職員会を一月交代に行なっています。またある学校では、日曜学校全体の職員会を毎月行い、それに加えて、各科の職員会議を毎月、あるいは毎学期行うようにしています。その方法はどちらにしても、小学部下級科の職員たちが、計画をたてたり、自分たちの直面している問題の解決をはかるために、定期的に会議を開くということは必要なことです。この会議の内容、およびそれに対する準備は、日曜学校全体の職員会議の際と、ほとんど同じようにすることができません。

科の設備

子供たちにどのような教室を与えるかということは、彼らの日曜学校また、教会に対する将来の態度を決定する原因になります。実際問題として、小学部下級科の教室は、日曜学校全体の中で、最も楽しい場所でない限りありません。それは明るくて、いつも新鮮な空気が溢れ、壁の色も美しく、良い家具の入っ

た部屋でありたいものです。ちょっとした注意を払い、また努力をすることが、やがて未来において、子供たちによって、大いに報いられる結果を生み出すのです。

一、新築と改造

日曜学校の働きのために、校舎を新築できる教会はなんとすばらしいことでしょう。もし、そのような祝された教会がありますならば、ぜひとも実際に建築を始める前に、十分に注意深い計画を立てていただきたいと思えます。熟練した教会建築家によって、さまざまな面から設計を検討してもらい、良い日曜学校の校舎を作るようにして下さい。その際に覚えなければならぬことは、計画は現在の教勢に合わせてたてるのではなく、将来の日曜学校を考えて、たてなければならぬということです。できるならば、子供たちの教室は地下や二階、三階ではなく、一階にしたいものです。また科全体の子供が集まって礼拝集会ができるような大きな部屋も作らなければなりません。そして、各教室はその大ホールの片側か両側に並べて作るべきです。教室は大きくする必要はありませんが、どんなに小さくても、四畳半位の大きさは欲しいものです。それは理想的な一クラスの生徒数は六名から八名だからです。

古い建物で不十分な設備をもって日曜学校をしている人々は、現在の設備をより良く改造したり、あるいは増築したりすることができるといふことを覚えて下さい。部屋が一つしかない日曜学校は多くあるのですが、カーテンをひいたり、折たたみ式の衝立や普通の衝立などを用いて、各クラスを分離することも

できます。たとえ、あなたの今の場所がどのような場所であったとしても、それはきつと改造し、良くすることができるとです。小学部下級科の子供たちだからといって、空気よんだ、暗い、しかもほこりの溜っている物置の隅のような所で、こわれた家具などと一緒に集会しなければならないという事は絶対にいはずです。こういう状態を見たら、職員たちがしばらくの時間をさいて、不用な物を片付け、掃除をし、ペンキを塗るようにしてごらん下さい。きつと見違えるようなよい教室を作ることができるでしょう。

二、小学部下級科の部屋と設備

理想的な日曜学校の設備について、幼稚科の方で語りましたが、小学部下級科にも同じことが言えます。各部屋には少くとも一つの窓があり、外からの光を入れ、また空気を入れることができるようにしておかなければなりません。カーテンを窓枠に掛けて、壁も明るい落ちついた色に塗り変えるようにしたらよいと思います。教室には黒板が絶対に必要ですが、それは子供たちの目の高さに備えなければなりません。教室の一方の壁には、青い布などを貼って掲示板にして、いろいろな展示物を貼るようになります。多分、クラスで一番大切な設備は、子供たちの使う椅子と机とではないでしょうか。どの日曜学校でも、子供たちの高さに合った椅子や机を備えなければなりません。椅子は四〇センチ以上高くは無理です。テーブルの大きさと形は、部屋の大きさと形によってきめられますが、U字型をした机は、教師が子供の工

作などを手伝う時に非常に便利だと思えます。一人一人の椅子が作れない場合には、長椅子（ベンチ）でもよいでしょう。ある日曜学校では、みかん箱をうまく利用し、改造して椅子にしているところもあるそうです。教室には、聖書に出てくる情景を描いた絵などを飾っておけば、子供たちには良い影響、感化を与えます。それから、子供たちのオーバー・コートなどを掛けておく洋服掛けも必要です。電灯も十分な明るさのものをつけたいものです。傘のない裸電灯をつけておくようなことは避けて下さい。さらにフランネルボードを三脚にのせて使うように準備して下さい。砂箱も小学部下級科のクラスの場合、便利な教材の一つです。床はできたら、じゅうたんを敷くのが一番良いと思えます。また、さまざまのものを展示して、子供の興味をひく展示机も一つ二ついることでしょうか。教室の入口は一つにして、そこからだけ出入りをするようにした方がよいと思えます。以上記したものは、ほんの主だったものの一例ですが、これらのものを全部一度に揃えるということは、どの日曜学校にとってもなかなか大変なことです。しかし全部一度に集めずに、少しずつ集めていけばよいのではないのでしょうか。以上あげたものは確かに物です。しかし、正しく用いるならば、子供をキリストに導くのに非常に大きな働きをするものです。

準備ができたならば、教師はその教室に入って、ゆっくりと部屋の状態を見回して下さい。窓はきれいになっているでしょうか？カーテンは汚れていないでしょうか？椅子にはほこりが溜っていないでしょうか？テーブルはきちんと並んでいるでしょうか？教師は日曜学校の始まる前に、必ず自分の教室に行っ

で、すべてのものがきちんと整っているかどうかを見直す必要があります。さらに、黒板はきれいになっているでしょうか？黒板に使う白墨は各種の色のものが準備されているでしょうか？と考えて下さい。このように、わたくしたちが教室のあらゆるものをきれいに、そしてきちんと備えておくならば、子供たちも日曜学校は楽しい所だと考えるようになるでしょう。そして毎日曜、続けて来たいという気持になると思います。そして、そのことが、実は永遠に彼らを教会とキリストに結びつける原因ともなっていくのです。

第九章 子供たちの獲得

子供を捕えるということには二つの働きがあります。第一は拡張といわれる、子供たちを集めることです。第二は伝道、すなわち子供たちをキリストに結びつけることです。これらは両方ともが大切なことです。よく第二のことが強調されて、第一のことが忘れられてしまうようです。しかし、伝道をして子供の魂を捕えるためには、まず彼らを教会に連れてこなければなりません。そこで、子供たちを集める方法について考えてみましょう。

一、欠席者のフォローアップ

日曜学校全体にしても、小学部下級科にしても、子供を得るということは、一番大きな問題です。子供たちが欠席して、それからだんだんと遠ざかっていくのにひきかえ、新しい子供はなかなかふえないのです。もし、日曜学校に来る子供たちを全部つかまえておくことができるなら、教勢はどんどん伸びていくことになるでしょう。

しかし、常にこの欠席者の対策を効果的にしていくことは、決して容易なことではありません。それは訪問に最適任と思われる教師にとっても、主任や他の職員にとっても、大変な働きとなるのです。しか

し、このために科の職員全員が協力して進んでいかなければならないのです。

それには、まず欠席者を知ることが必要です。教師は毎日曜日、どの子供が休んだかを知らなければなりません。もし、欠席者がいれば、次の週の間に訪問をしなければなりません。大きな科なら、書記が欠席者を見出して、各教師に示すようにするのです。

その際に、訪問をするべき子供たちの名前や住所などを記入した訪問カードを教師に渡すようにしたらよいでしょう。一番簡単な方法は、生徒各自の欠席カードというものを作っておいて、その生徒が欠席した場合には、それを抜き出して教師に渡し、また、訪問をした教師は、それに訪問の結果を記入して書記に返すようにする方法だと思えます。

欠席者に連絡をする場合、最も効果的なのは訪問です。地域によって相違がありますが、だいたい葉書を出すことは子供の場合あまり効果がないようです。しかし、教師が訪問をしてくると、子供も両親も大変感激をするものです。教師も子供の家庭をよく理解し、背景をよく知って、より良い指導をすることができますようになります。

もし訪問ができない時には、手紙を書くか電話をかけるのが良い方法です。しかし、もし訪問ができないならば、だれか他の教師に訪問してもらおうように考えるべきです。科の主任が訪問するのも非常に効果があるようです。

訪問が済んだ時には、前述したように、カードに記入して報告をしなければなりません。報告も不注意

にしたり、怠けたりしてはいけません。

二、入学候補者

わたくしたちの働きは、現在、日曜学校にいる子供たちを保つだけでは十分ではありません。欠席者の訪問をすることも、生徒を保つという意味においては有益な働きですが、それだけでは十分ではないのです。わたくしたちは、自分たちのクラスが成長し、その地域社会にまで浸透していくことを目標としていかなければならないのです。その方法といえは、わたくしたちの方から「道やかきねのあたりに出て行って、……人々を無理やりにひっぱって」来ることだと思います。

(a) 候補者の表

わたくしたちは、まず日曜学校に連れてきたいと考える人々のリストを作らなければなりません。これは教師一人では十分にできませんから、教会が日曜学校全体でその地域社会の調査をしてみることが必要でしょう。そのことによって日曜日の朝、どこにも行かないで遊んでいる子供たちがいることがわかってきます。また、教会に出席している家族の中にも、日曜学校に来ていない子供たちがいる場合もあります。また、牧師が訪問をしている間に、日曜学校に行っていない子供たちに遭遇することもあります。また、最近引っ越しをして来た家庭などを紹介してもらうこともできます。このようにして、わたくしたち

は、候補者として考えられる子供たちのリストをふやしていかなければなりません。

(b) 候補者の訪問

候補者のリストは、カードにして一枚一枚記入して、ファイルしておくのが一番よいと思います。欠席者の訪問を教師に頼む時に、同時に何人かの候補者を訪問して誘うようにしてもらったらいでしょう。欠席者の訪問と同様に、多分、候補者に対する訪問も、喜ばれることでしょう。このような、教師の家庭訪問によって、子供だけでなく、家庭全員が教会に来るようになることもあります。ですから、教師、または訪問を専門にする職員によって、効果的な訪問が行われていくなら、日曜学校の教勢は急速に伸びていくはずです。

この働きと共に、わたくしたちは伝道もしなければなりません。一生懸命に集めた子供たちの魂をキリストの救いに導かないならば、わたくしたちの努力は、無駄になってしまいます。魂の救いこそ、日曜学校の働きの中心なのです。

一、個人的責任

子供たちをキリストに導いていく責任は、だれにあるのでしょうか？彼らに真理を示し、福音を理解さ

せるのはだれなのでしょう？それは毎日曜日、日曜学校で聖書を開き、教えていく教師であることは、だれもが感じていることです。これは、また教師自身が絶えず意識していなければならぬ大きな責任であり、特権なのです。日曜学校の働きは非常に大切なものです。小学部下級科の子供たちが、今、習い覚えているものが、彼らの将来を決定していくのです。もし、わたくしたちが彼らを救主のもとに連れていくことができるならば、彼らは新生の体験をもち、やがて訪れる危険な時代にも、それを保ち続けて、生涯、幸いなクリスチャン生活を続けることができるようになるのです。

子供たちをキリストのもとに導くこの働きを、自ら背負うという覚悟を持たない人々に、わたくしたちは小学部下級科の責任を持たせることができないのです。魂を導くには子供のための祈りと、とりなしの生活がなければなりません。絶えず彼らを理解し、すべての困難や問題を乗り越えて、目的に向かっていく愛も必要です。さらにこの子供たちを保ち続け、救主とそのすばらしい救いを知らせようという強い決心がなければなりません。下級科の教師は、常に御霊の働きに対して敏感で、機会が与えられたなら、ただちに、子供たちを祈りに導いていく人でなければなりません。恵の座は、授業中に開いてはいけな場所ではないものではないはずです。かえって、それは逆で、いつでも、たとえ屋外で子供たちの集りをしている場合でも、もし機会が訪れた時には、むぎむぎと無駄にすることがないようにしなければなりません。

魂の獲得という働きは、教師にだけまかせられた働きではありません。主任も他の職員も、共にその重荷を分かち合っていかなければならないのです。教会の牧師も同様に、子供たちをキリストに導く責任を感

しなければなりません。そして教会の集会や日曜学校の決心日などには、神のみ言葉を語り、福音の網を投げて、子供たちをキリストに導くように助力すべきです。もし、教師の中に靈的な責任をとろうとしなさい者がいるならば、校長か牧師はそのことを注意し、もし応じないならば、よりよい働きをする人と交代させるようにするべきです。キリストが、尊い魂をわたくしたちの日曜学校に導き集めて下さったというのも、わたくしたちが彼らをキリストのもとに導くためです。たった一人の人の不忠実さによって、この働き全体が失敗に陥ることがないように、わたくしたちは注意しなければなりません。

ある人々は、「わたくしたちはこんな小さな子供たちに、救いの真理などを教えることはできません。彼らは到底、イエスの血潮とか信仰の道などというものを理解することはできないのです」と言うかもしれませんが。しかし、これは真実ではないと思います。神を知らない心理学者たちは、そのようなことを言うかもしれませんが。しかし、わたくしたちは、もしキリストの贖いの根本的な真理が、正しく教えられていくならば、小学部下級科の子供たちもそれを理解し、受け入れていくことを信じます。もちろん彼らには抽象的な真理を具体的なものとして説明しなければなりません。そのためには、わたくしたちが努力しなければならぬのです。とにかく、わたくしたちは、彼らがキリストのものであるということを覚え、いつまでも導くことをせず遂に彼らを永遠に失うことのないようにしなければなりません。

二、伝道の計画

伝道というものは偶然にできるものではありません。それは計画の中に、はっきりと打ち出されなければならぬものです。わたくしたちは職員会議などでよくこのことを強調して、教師一同が絶えず伝道に関心をもち、注意をするようにしなければなりません。また会議の席上、各教師に何人の子供が決心をしたか、報告をさせることもよいことだと思います。

少くとも一年に一度は、科全体が集るような時に、決心日をもつようにしたいと思います。その日には、本当の伝道の計画をたて、教師も他の職員も皆、神の祝福が格別に注がれ、多くの子供たちがキリストの救いを体験するように、十分に祈りをするべきです。多くの日曜学校では、これを日曜学校全体の計画として行いますが、小学部下級科だけの計画としてもよいのです。ある日曜学校の下級科では、毎学期これを行っているということですが、大抵、その時には牧師に来てもらって、子供に適した伝道メッセージを語ってもらうようです。そのことによって、キリストを信じたがらないような子供も、遂に砕かれてキリストの救いにあずかったという例は、数多くあるようです。

三、祈りと聖霊

伝道ということを考える時に、わたくしたちは、祈りと聖霊の働きを最も強調しなければなりません。子供たちの魂の中に、新生が体験されるためには、その前に祈りによる陣痛がなければなりません。

子供たちを自分の心に向け、絶えず彼らのために祈らない教師が多くいるというのですが、これは間違ったことだと思えます。

わたくしたちは、また、聖霊が人々の魂に働きかけ、み言葉を生きたものとして示さない限り、だれも救われることがないということを考えます。聖霊こそ、彼らに罪を示し、救主の必要を示し、霊的な誕生による新しい生命を作り出してくれるかたなのです。わたくしたちは、どんなに力んでも、自分たちの努力によって彼らを救うことはできません。それは聖霊だけがわたくしたちのためにあらゆる準備を整えなければなりません。ですから、わたくしたちは、彼の臨在を尊重し、彼のためにあらゆる準備を整えなければなりません。わたくしたちの心も、わたくしたちの同労者も子供たちも、みな聖霊の働きを待ちうける態度を整えていなければなりません。聖霊は子供たちの心に臨んで、すばらしい働きをしてくれるのです。ですから、わたくしたちは彼と協力して働きたいと思えます。

そのためには、職員が皆、聖霊に満たされ、わたくしたちの科もクラスも共にいつも聖霊の臨在に満たされるように求めなければなりません。そして多くの尊い子供たちが、小学部下級科の三年の過程を学び続ける間に、救主イエスのもとに来て、み救いにあずかることができるように、わたくしたちは、聖霊と共に自己の最善をつくし、目的の達成されることを待ちのぞみたく思うのであります。

教える秘訣 小学部下級科編 © 1963

昭和38年4月10日 初版発行
昭和44年5月1日 第二版発行
昭和53年1月20日 第三版発行
昭和57年11月1日 第四版発行

定価 1,000円

著者 ハート R. アームストロング
ヘイゼル エッゲマン
訳者 伊藤 顕 栄
印刷 ときわ印刷株式会社

発行所 日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
日曜学校部

東京都豊島区駒込3丁目15番20号
郵便番号 170
振替東京0-10877 10877 電話 (918) 0497